

41755

教科書文庫

4

810

41-1929

200030
2023

Kodak Gray Scale



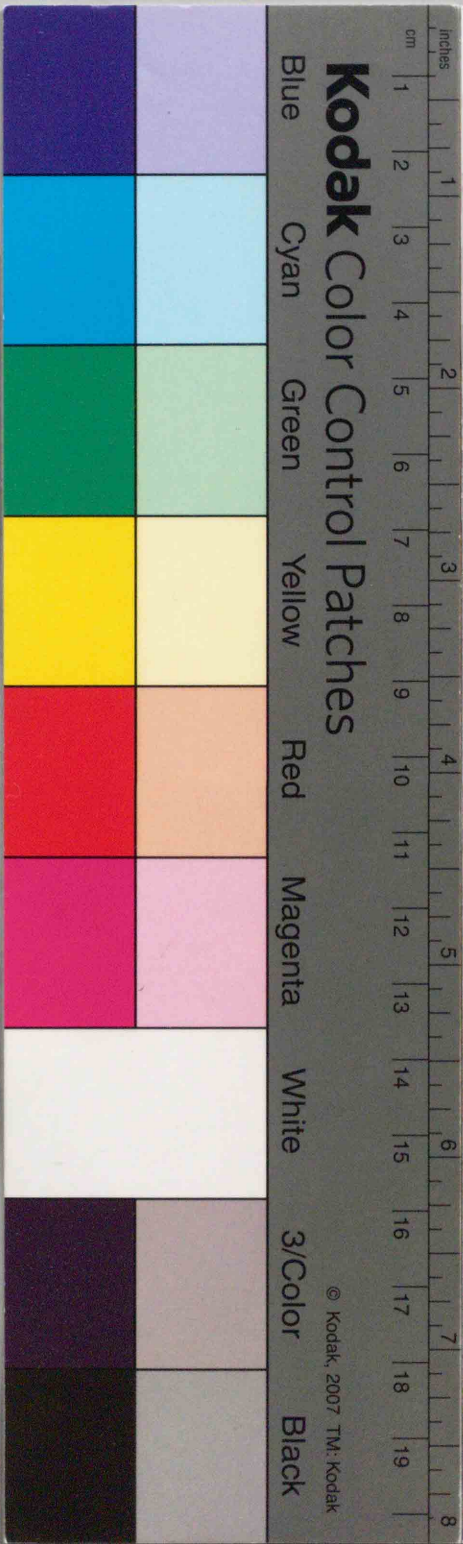
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759
Fu10
資料室

中等國文

卷六



昭和四年三月二日
文部省檢定濟

文學博士藤井乙男編
中等國文
東京金港堂書籍株式會社

給
師
給
師
給
師
給
師

資料

3759
Fru 10

120冊
50冊
40冊

1254

120

格致中
格致中
格致中
格致中

學校

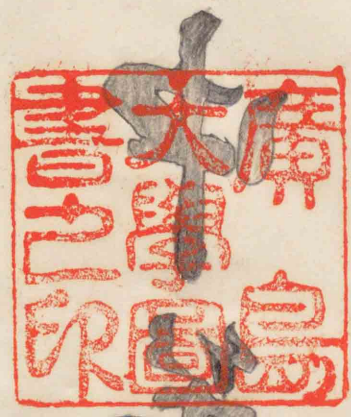
格致中學校

格致中學校

第一學年
第二學年
第三學年
藤井乙男
編

給
師
給
師

東京 東京大学文学部蔵書印



吉



朱

中等國文卷六

目次

一	向上	德富猪一郎	一
二	陽氣な秋	石川欣一	七
三	最後の雄たけび	岩野泡鳴	四
四	初秋の朝飯	北原白秋	六
五	愚物	生田春月	六
五	秋三篇	上田敏三	三
1	落葉	高村光太郎	三
2	秋の祈	室生犀星	六
3	天の虫		

目次

中
等
國
文

一

六	大義名分	北畠親房 元
七	爲朝の弓勢その一	(保元物語) 三
八	爲朝の弓勢その二	(同) 六
九	遊び	北原白秋 四
一〇	諺 その一	滋野貞融 五
一一	諺 その二	夏目漱石 六
一二	讀書眼	芥川龍之介 七
一三	ケーベル先生(自習文)	(太平記) 八
一四	戲作三昧	大高源吾 九
一五	正行参内	
一六	永訣狀	

乃木將軍
オ

一七	乃木將軍	森 林太郎 六
一八	邦人の性格	姉崎正治 三
一九	そら行力	(吉野拾遺) 二五
二〇	早春	貝原益軒 二九
二一	菅 公その一	(趣味の日本史) 三三
二二	菅 公その二	(同) 二六
二三	月と梅	武者小路實篤 三三
二四	文藝と人生	佐藤惣之助 三九
二五	瓜の天地	夏目漱石 四〇
二六	ロンドン塔	(源平盛衰記) 四二
二七	故郷花	

- 二八 扇の的
- 二九 早蕨
- 三〇 印度洋(自習文)

(平家物語) 一五
吉江喬松 三五



中等國文 卷六

一向上

徳富猪一郎

人には、天分あり。何人も、如何なる方面に向ひても、同一に長進せんとするは思ひもよらぬ事なり。「舜何人ぞや、我何人ぞや」とは、男兒發憤の意氣を示したる豪語なれども、舜には、舜の天分あり、我には、私の天分あり、私の舜たり難きは、猶、舜の我たり難きが如し。横綱には、生れながら横綱の素質あり、本因坊には、生れながら本因坊の素質あり、雪舟にても、ラファエルにても、杜少陵にても、沙翁にても、或は、メンデルゾーン、ワグネル

發憤

徳富猪一郎
評論家、歴史家、蘇峰と號す、文久三年熊本に生る、京都同志社出身、元國民新聞社長。

雪舟

(1001-1066)
ラファエル

(Raphael)
伊太利の畫聖

西暦(1581-1600)

杜少陵

杜甫(712-770)
沙翁

(Shakes ear)
西曆(一六一一—
一六一六)
メンデルグー
(Mendelssohn)
獨逸の作曲家
西曆(一八〇一—
一八四七)
ワグネル
(Wagner)
獨逸の歌劇作
家
西曆(一八三二—
一八八三)



人間は、唯、我が最善の力を
竭して、達すべき所に達すべ
きのみ。是に於てか、向上の
工夫は出で來らざるを得ず。
向上とは、總ての人を驅りて、
基督たり、釋迦たり、孔子たら



ルにても、苟も、第一流の達人
には、自らその天分ありて、之
に加ふるに、修養を以てした
るなり。その素質ありてそ
の域に達せざるは、これ修養
の足らざればなり。

ルネグワ

誇大妄想

綽々乎

正鵠

遑々

しめんとするにあらず。吾人が三聖たる能はざるは、猶、吾人
が、沙翁たり、少陵たり、雪舟たる能はざるが如し。人、往々、天分
の先天的に存するを無視す。此に於て、動もすれば、誇大妄想
狂者となり、然らざれば、自ら失望して、窮途の餓鬼となる。人、
若し、向上せんと欲せば、天分の範圍内に於て向上せよ。
乎として、進修の餘地存せずんばあらず。
所謂己を知るとは、我が天分を知るなり。所謂己を修むとは、
我が天分内に於て精進するなり。向上の正鵠、斷じて是に在
り。若し、徒らに、他人が大臣たるが故に、我も亦大臣たるべし
といひ、他人が元帥たるが故に、我も亦元帥たるべしといはば、
終生遑々、唯、他人と長短を争うて、これ暇あらざらんとす。何
を以て、我が天分を全うするを得んや。

綽々
乎

向上の正鵠一たび定まる、故に向上の快樂あるなり。人間の行路は、圓環を行くが如く、唯、幾回となく、同一の範圍を往來すべからず。宜しく、正面に目的を定め、之に向ひて前進すべし。而して、その努力が、これ快樂なり、その努力の結果が、これ快樂なり、その努力の結果の豫期が、これ快樂なり。昨日の我に比すれば、今日の我には一段の進歩あり、これ、豈、悦ばしからずや。凡そ世に快樂多きも、向上の快樂の如く、清且高なるものはあらず。

しかも、向上は自己の勢力を周圍に擴大する意義にのみ專用すべからず、須く、自己を完全ならしむる點に於て、その力を用ひざるべからず。凡そ外に自己を擴大せんと欲せば、宜しく、内に自己を完全ならしめざるべからず。言ひ換ふれば、自

己の性情を鍊磨し、自己の性癖を矯正し、自己をして、少くとも、中心に大いなる悔恨なからしむるだけの工夫あるを要す。余嘗て、羅馬の賢帝マルクス・オウレリウスの、汝の全幅の注意



スウリレウオ・スクルマ

を眼前の事物に與へよ。苟も、之を閑却せんか、これ自ら不幸を招くなり。何となれば、汝は今日の過失を今日に改むることを得ずして、之を明日に遷延せしむればなり。」との語を讀み、轉た、その平凡なるに驚きたり。今にして之を思へば、哲人の用意、實に周匝なるを見る。苟も、この心を以て、日常の事物に處せんか、一日には一日の向上あり、一年には一年の向上あり。終生此の如くならば、所謂

マルクス・オウレリウス
(Marcus Aurelius)
西暦(三一二)

遷延

周匝

聖人たらざるも、亦聖人の徒たるに作づることなかるべし。凡そ、一生を無益に消費すると、有益に消費するとの差別は、一生の總勘定によりて定まるが如しと雖も、その實は、向上心を有すると否とによりて決せらるゝものといふも、過言にあらず。縦令、總勘定に於ては剩す所多からざるも、若し、向上心を持して一生を始終せんか、一日の生活には必ず一日の意義あり。苟も、意義ある生活は、決して無益の生活なりといふべからず。人は、その同胞に盡すの義務あり、即ち、自己の天分を全からしむるの義務あり。向上の生活は、主として自己の天分を全からしむる所以の生活たるを知らば、之に加ふる有益なる生活は斷じて無かるべきなり。

二 陽氣な秋

石川欣一

石川欣一
大阪毎日新聞
社員
主観

聯想的
物のあはれ
春はたい花の
はひとへに咲く
ばかり物の哀
は秋ぞまささ
る。拾遺集、
雜下、詠人不
物の哀は秋こ
そまさされと人
れど、(徒然
草)の道や
芭蕉の句

勿論これは主観の問題である。だから私が秋は陽氣だといつても、いや俺にとつては、秋は大いに悲しいと云ふ人があ
るかも知れぬ。あつても一向不思議ではない。ある方が當
然なのかも知れぬ。

それにしても、主観ばかりでなく、我々は一體、いくらか聯想
的に秋を哀しいものと思はせられてゐるものらしい。現に
小學校の教科書にさへ「滿目秋蕭條」といふ様な文句が入つて
ゐる。それから物のあはれは秋こそまさされ」を讀み、この路や
行く人無しに秋の暮を聞くのだから、我々はどうしても、秋は悲
しいもの、淋しいものと思ひ込んで了ふ。

栗鼠の倉云々

The squire's granary is full.

イギリスの詩人。

キーツ (John Keats) (1795-1821)

ラ、ベル、ダム、サン、メルシ、

(La Belle Dame Sans Merci) フランス語。英訳すれば、

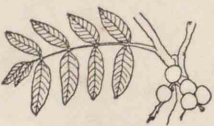
The beautiful lady without mercy.

強ひて異説を唱へるのではないが、秋は決して淋しいものではないと思ふ。却つて陽氣な所が多い。春の和暖、夏の情熱に對して、——勿論これも私一人の考で、他の人には異論もあらう——秋は實に、いゝ陽氣さを持つてゐるやうに思はれる。

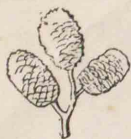
「秋」と聞いて、いつも思ひ出すのは、「栗鼠の倉は充ちた」といふキーツの文句である。これは、云ふ迄もないが、ラ、ベル、ダム、サン、メルシの第二節にあるので、詩全體としては、湖畔から菅草が枯れて失せ、鳥も啼かず、空は鉛色の淋しい秋の終を出してゐるのだが、どうも私にはこの「栗鼠の倉も一杯になつた」が、楽しい秋の一面をあらはしてゐるやうな氣がしてならぬ。

伶俐

くるみ



榛の堅果



フルートフルネス

(fruitfulness) みのりのよきこと。

恐らく木葉が落ちつくして、木々の幹が白く輝く疎林の中であらう、木の枝か、落葉の下かは知らず、とにかく、あの伶俐な栗鼠が、我が倉庫、貯蔵庫とするものがあつて、そこには胡桃や栗や榛の堅果が一杯になつてゐる。これで、冬中、雪が降らうが、葉が落ちようが、栗鼠は枯葉をかぶつて、あたゝかくしてゐることが出来る。何といふいゝ秋なのだらう！ 私には、自分の庫の前に前肢をあげてさかしげに坐る栗鼠の顔が見える。

同じキーツの「秋の歌」も、また、いゝ二行で始つてゐる。「霧と、やはらかいフルートフルネスの季節！ 成熟しつゝある太陽の極めて近い心友！」このフルートフルネスなる言葉は、私には和譯が出来ない。すべて物事がよく出来上り、みのり、熟

することを云ふのである。

何もこんな風に先人の句を引いて来る必要はないのだが、不思議にキーツの栗鼠を思ふことが、とう／＼私をこゝ迄ひつはつて來た。十九世紀の英文學を離れて、すこしくあたりを見まはして見ようか。

日本の秋は、何と云つても稲である。あのゆたかな黄金を一面に敷きつめたやうな田圃を見て、こいつは淋しいと思ふ人があるだらうか。殊に刈入れ後のしばらくを、農家では何と云ふか、田の邊に刈つた稲を、低い塀のやうに立てならべた處に、午後の日が日溜りをなしてゐるに至つては、たとへその反對側に淋しい路が白く横はつてゐるにせよ、どうしても人

麥秋

の心を陽氣にする。

麥秋もよい。が、あの頃の濕氣を帯びた空氣と、妙にためらふ黄昏とは、精神的よりも、肉體的に私の頭を重くする。

いろ／＼な樹の紅葉も、私の心を楽しませる。柿が殊にいゝ。思ひかけぬ所に、小さな白膠木（白膠木）が大きな紅葉をつけてゐるのも、面白いものである。

私は落葉を焚くのが好きである。すべて乾いてゐるから、氣持よく箒に當り、氣持よく燃える。落花にくらべて、何と思ひ切りよく掃かれて集り、また勢よく燃えるではないか。

焚くばかりではない。木の葉の散るのは、見てゐても氣持がよい。木によつて異なるが、飛行機が滑走するやうに、斜にス



白膠木

凋落

一ツと下りて、また方向を變ずるのもあるし、最初からペラペラと回轉するものもある。

元來落葉は凋落それ自身である。凋落を悲しまぬのは不人情であるが、私とすれば、散る物は早く散つた方がいゝやうな氣がする、そのあとには、もう新しい葉が出来てゐるのだから。そしてその新しい葉は、厚い、丈夫な、鱗のやうに重り合つた外套を着て、大人しく、小さく、來年を待つてゐるのだから。秋の日は弱くとも暖かい。私には落葉のあとの來年の葉が、皆よろこんでゐるかのやうに思はれる。

淋しいものとされてゐる秋の風も、私には大して淋しくもない。しめつほい春の風や、熱病やみのやうな夏の風より、餘程

有難い。朝起きて、やつ今朝は少し寒い位の風が吹いてゐるぞ、と感じることは、私にとつては體內を血がかけめぐることである。寒い風に刺戟されて、チリンチリンと音を立て、血が走り廻ることである。私はむしやうにうれしくなる。髯を剃つたあとで、兩手で頬をたたいて、顔を赤くする。殊に、いよ／＼冬になつて、鼻と耳だけを寒氣にさらし、身體は大きな外套にくるまる氣持は、たしかに悪くない。



落葉焚き

岩野泡鳴
詩人、小説家、
評論家、淡路名は
美術家、大正四
九年の、年正
十八。

三 最後の雄たけび

きりぎりす

岩野泡鳴

門内の 小ばたけに
胡瓜 や 茄子 の 無くなつた 晩秋の夕
とまる ところ を 求めて きりぎりす
ほつねんと

——但し 饑ゑ に 慄へる 物乞

ひ——玄關さきの 敷き石に來て

その ほのほ も 細る 翡翠ひすい

の 羽ぶるひ

なほ 切れぎれに いのち を

ちやん—ちやん—ぎいす!

敷き石 の うへに きりぎりす

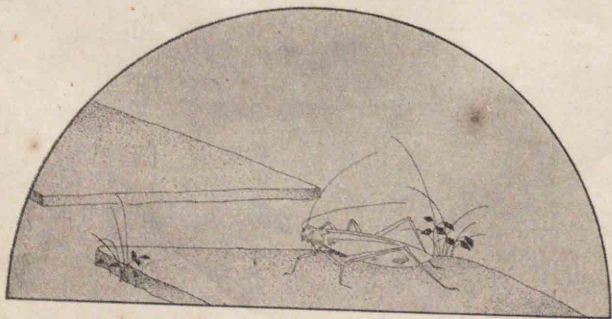
つめたい 石 の うへに

もう飛ぶ ちからも 失せて た

ゞ 獨り この 秋の日 を 消

え行く 生に 對して その か

すれた聲は 併し 最後の雄たけび!



北原白秋
詩人、歌人、明
治十八年筑後
柳河に生る。

初秋の朝飯

北原白秋

正眼まきめに観入る

白芙蓉しろあすなご

幽かに聴くは

瀬のひびき。

秋はずしき山水やまみづに、

時たまひた涵るわがこころ。

白の朝飯、

白芙蓉。

今朝も身に染む

水しぶき。

(水墨集)

生田春月
詩人、鳥取縣
の人、明治二
十五年生る。

四 愚物

生田春月譯

一人の愚物があつた。

長いこと、彼は、平和に満足に暮してゐた。ところが、自分が世間からつまらぬ愚物だと目せられてゐると云ふ噂が、だんくくと彼の耳へ入つて來出した。

そこで愚物は、悲しくなつて、どうしたら此の面白からぬ噂の跡を絶やしてしまへるだらうかと、打沈んで思案し始めた。とうとういゝ思ひつきが、彼の鈍い小さな頭腦にふいと浮んだ。……そこで早速、彼は、それを行つて見る事にした。

街へ出ると、一人の友達が、彼に出會つて、或有名な畫家を賞めそやした。

賞めそやす

「待ちたまへ！」と愚物は叫んだ、その畫家は、ずつと前に時代後れになつてゐるんだ……君はそれを知らないのか？まさか君がさうだとは思はなかつた……君はすっかり時勢に後れてゐる。」

その友達は、驚いて、直ぐ愚物に同意した。

「僕は今日すばらしい書物を讀んだよ！」とまた違つた友達が、彼に云つた。

「待ちたまへ！」と愚物は叫んだ、君はそれでよく恥しくないのかね。あの書物は、一文の價值も無いんだ。誰だつてずつと前に讀棄てたものなんだ。君はそれを知らんのか？君は全く時勢後れだよ。」

此の友達も驚いて、愚物に同意した。

「何てすばらしい男だらう、僕の友達のなにがしは！」と三人目の友達が愚物に云つた。「實際鷹揚な男だよ！」

「待ちたまへ！」と愚物は叫んだ。「なにがしは有名な悪黨だ！親戚中を騙り歩いた奴だ。そりや誰でも知つてる事だ。君は全く時勢に後れたね！」

此の三番目の友達も驚いて、愚物に同意して、その友達を棄てた。かうして、誰であらうが何であらうが、自分の前で賞められるものなら、愚物はきつと例の返答をした。

時によると、彼は、非難の調子でかう附け足した。「ぢやまだ、君は、オーソリテイを信じてゐるのか？」

「意地の悪い憎々しい奴だ！」と友達は愚物の事を云ふやうになつた。「併し何と事ふ頭脳だらう！」

オーソリテイ
(authority) 權威

「そして何と云ふ辯舌だらう！」と他の者は附け足すのであつた。「さうだ、たしかに天才だ！」

つひには、或雑誌の主筆が、愚物に評論欄を引受けてくれと云つて來た。そこで愚物は、例の態度、例の表白を少しも變へないで、何事をも何人をも批評するやうになつた。

今や、曾てはオーソリテイを撃破した彼が、自らオーソリテイとなつた。そして青年は、彼を尊敬し、彼を畏れた。

かはいさうな青年は、さうする外に何をする事が出来よう？……が、この場合には、若し人が彼を尊敬しなければ、全く時勢後れになつてしまふのだ！

臆病者の間には、幾多の愚物が時めいてゐる。——ツルゲネーフ散文詩——

上田敏

英文學者、詩人、京都帝國大學博士、教授、大正十五年歿。

井オロン

セロよりも大きいヴァイオリン形の樂器。

ひたぶる

五 秋三篇

落葉

上田敏

秋の日の
井オロンの
ためいきの
身にしみて
ひたぶるに
うら悲し
鐘のおとに
胸ふたぎ

うらぶる

散らふ

色かへて
涙ぐむ
過ぎし日の
おもひでや
げにわれは
うらぶれて
ここかしこ
さだめなく
とび散らふ
落葉かな

(上田敏詩集)

高村光太郎
彫刻家、詩人、
東京の人。帝室技藝員、高
村光雲の男、高
東京美術學校
彫刻科出身。
曉々

秋の祈

高村光太郎

秋は曉曉と空に鳴り、
空は水色、鳥が飛び、
魂いななき、
清淨の水こころに流れ、
こころ眼をあけ、
童子となる。

多端紛雜

多端紛雜の過去は眼の前に横はり、
血脈をわれに送る。
秋の日を浴びて、われは、靜かにありとある此を見る。
地中の營みをみづから祝福し、

因果律

わが一生の道程を、胸せまつて思ひながめ、
奮然としていのる。
いのる言葉を知らず、
涙いでて、
光にうたれ、
木の葉の散りしくを見、
獸の嬉嬉として奔るを見、
飛ぶ雲と、風に吹かれる庭前の草とを見、
かくの如き因果歴歷の律を見て、
こころは強い恩愛を感じ、
又止みがたい責を思ひ、
堪へがたく、

よろこびとさびしさとおそろしさとに跪く。
いのる言葉を知らず、
ただわれは空を仰いでいのる。
空は水色
秋は唳唳と空に鳴る。

(詩讀本)

室生犀星
詩人、明治二
十年金澤市
に生る

天の虫

室生犀星

松はしんたり
松のしん葉しんたり
すがたを見せぬ日ぐらしの
こゑを求めば

あらぬ方より
かなかなかなと寂しきものを
松のむら立つ
寺の松
梢をながめかなかなを求むれば
かなかなむしは天の虫
啼くとし見れば天上に
かなかなかなと寂しきものを

(室生犀星詩選)

六 大義名分

北畠親房

前車の轍
かし
さのみ
制符

およそ、王土に生れて、忠を致し命を捐つるは、人臣の道なり。必ず、これを身の高名と思ふべきに非ず。然れども、後の人を勵まし、その跡をあはれびて賞せらるゝは、君の御政なり。下として、きほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功なくして過分の望を致すこと、自ら危むる端なれど、前車の轍を見ることは、誠にありがたきならひなりけんかし。中頃までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し家を失ふためしあれば、戒めらるゝも理なり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを停むべしといふ制符度々ありき。源

やから
いひがひなし
家の子郎従
あり

(一) 言語君子樞機。
白地 (易經)
(二) 履霜堅氷至。
(易經)

平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は、宣旨を賜はりて、諸國の兵を召具しけるに、近代となりて、やがて語らはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されき。果して、今までの亂世の基なれば、いひがひなきことになりにけり。この頃よりのことわざには、一度、軍にかけあひ、或は、家の子郎従、節に死ぬるたぐひもあれば、我が功におきては、日本國を賜へ。もしは、半國を賜はりても足るべからず。などぞ申すめる。誠に、さまで思ふことはあらじなれど、やがて、これより亂るゝ端ともなり、また、朝威のかるがるしさも推量らるゝものなり。
(一) 言語は君子の樞機なり。といへり。白地にも、君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むより至るならひなれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ心

しらす

言葉を慎まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色の改るにもあらず。人の心のあしくなりゆくを、末世とはいへるにや。大方、おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の恨を遺すべきことをばなどか顧みざらん、君は、萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて限りなき人に分たせ給はんことは、推して量り奉るべし。若し、一國づつを望まば、六十六人にてふさがりなん。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬の人は悦ばじ。況や、日本の半をこころざし、皆ながら望まば、帝王はいづくをしらせ給ふべきにか。

漢の高祖の天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも、張

高祖曰、夫選^ニ籌策^ヲ帷幄^ノ之中^ニ決^シ勝^ヲ於^テ千里^ノ外^ニ、吾^レ不^レ如^ク子房^ノ。
(史記高祖本紀)

留
 支那河南省開封府
 文治の頃
 文治五年七月

直實
 熊谷直實
 下文

良は、高祖これを師として、籌を帷幄の中に運らして、勝つことを千里の外に決するはこの人なり。」と宣ひしかど、驕ることなくして、留といひてすこしきなる所を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く亡びしかど、張良は身をまたくしたりき。

近き世のことぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追ひ討ちしに、自ら向ふことありしに、平重忠が先陣にて、その功勝れたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたるすくなき所を望み賜はりけりとぞ。これは、人にひろく賞をも行はしめんが爲にや。賢かりけるをのこにこそ。又、直實といひける者に一所を與へ給ふ下文に、日本第一の剛の者なり。」と書いて賜はりてけり。一とせ、彼の下文をもちて、奏聞する人のありけるに、褒美の詞の

甚しさに、與へたる所のすくなき、誠に名を重くして利を軽くしける、いみじきこと。」と口々に譽めあへりけり。いかに心



北畠親房筆蹟

得て譽めけんといとをかし。これまでの心こそなからめ、事にふれて君をおとし奉り、身を高くす

る輩のみ多くなれり。

ありし世の東國の風儀もかはりはてぬ、公家のふるき姿もなし。いかになりぬる世にかと、歎き侍るともがらもありと聞えき。

(神皇正統記)

新院
崇徳上皇

父子
忠正。その子
長盛、忠綱、
正綱、通正。

父子六人
爲義、その子
頼賢、頼仲、
爲宗、爲成、
爲仲。

不覺

七 爲朝の弓勢 その一

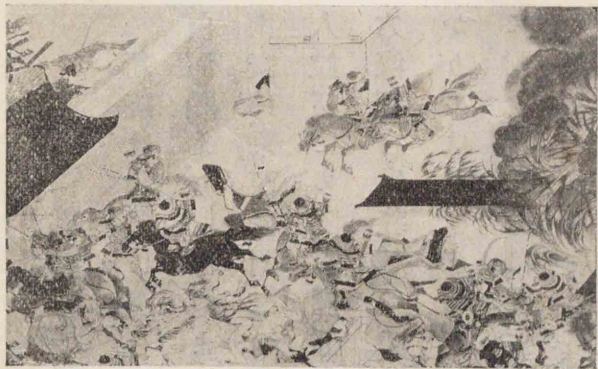
新院は北殿に遷らせたまひ、左府頼長は車にて参りたまふ。白河殿より北河原より東にありければ、北殿とぞ申しける。南表に、東西に門二つあり。東の門をば、平忠正承つて、父子五人並びに多田頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば、六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり。その勢、百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附きて、多分は内裏へ参りけり。ここに鎮西八郎爲朝は、我は親にも兄にも具すまじ。功名不覺もまぎれぬやうに、唯一人、いかにも強からん方へさし向け給へ。たとひ、千騎もあれ萬騎もあれ、一方は射拂はんずる

件

矢つぎ早
弓手
馬手
矢束

所を置く

不孝



なり。」とぞ申しける。よつて、西の河原表の門をぞ固めける。抑、爲朝一人として、殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量人に超え、心あくまで剛にして、大力の強弓、矢つぎ早の手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束をひくこと世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも物を置かず、旁若無人なりしかば、身こそへて都に置きなば悪しかりなんとて、父不孝して、十三の歳より鎮西の方へ追つ下すに、豊後國に居住し、十三の歳の三月の末より、十五の歳の十月ま

外上卿
忽諸
繪言



で、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十箇所なり。城を攻むる謀敵を伐つ術、人に勝れて、三年がうち、九國を皆攻落して、自ら總追捕使におしなつて、悪行多かりけるにや、筑前香椎宮の神人等都に上り訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、徳大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背繪言。梟惡頻聞、狼藉尤甚。早可令禁進其身、仍宣旨執達如件。然れども、爲朝なほ參洛せざりければ、同じき二年四月三日、

解官

父爲義を解官せられて、前檢非違使になされけり。爲朝これを聞きて、親の科に當りたまふらんこそあさましけれ。その



て、去年より在京したりしを、父不孝をゆるして、今度の御大事

形の如く

義ならば、我こそいかなる罪科にも行はれんずれ。とて、急ぎ上りければ、國人どもも上洛すべきよし申しければ、大勢にて罷り上らんこと、上聞穩便ならずとて、形の如くに付き、隨ふ兵ばかりめし具しけり。よつ

にめし具しけるなり。

爲朝は、七尺ばかりなる男の目角二つ切れたるが、紺地に色の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを著るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓長七尺五寸にて、鉄打つたるに、三十六さしたる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子孫子が難しとする所を得、弓は養由にも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、怖れずといふことなし。上皇をはじめまゐらせて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んとて、擧りたまふ。

銃

ゆゝし

吳子 周の魏の人、
兵法家。
孫子 周の齊の人、
兵法家。
養由 養由基、支那の名人。
周代の人、
弓

八 爲朝の弓勢 その二

ここにまた、安藝守清盛は、三條を河原にうち出で、筋違に東河原にうち渡り、堤を上りに、北へ向つてぞ歩ませける。その勢の中より五十騎ばかり、先陣に進んでおし寄せたり。「ここを固め給ふは誰人ぞ、名のらせたまへ。かく申すは、安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人伊藤武者景綱、同じき伊藤五、伊藤六」とぞ名のりける。

八郎これを聞き、汝が主の清盛をだに、あはぬ敵とおもふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代久しくなり下れり。源氏は誰かは知らぬ、清和天皇より爲朝までは九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫六條判官爲義が八男、鎮西八郎爲朝

柏原天皇、桓武天皇、御陵を山城、初紀伊郡深草山、柏原に造置し奉れる故にいふ。
六孫王、源經基、清和天皇第六の皇子、貞純親王の長子。

下藹

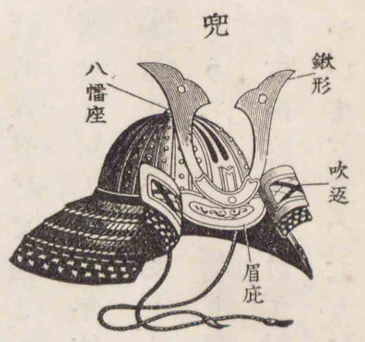
篔篋中

射向の袖

矢には

ぞ。景綱ならばひき退け。」とぞ宣ひける。

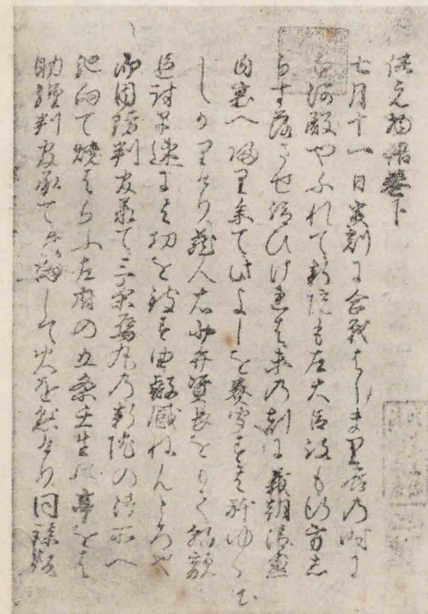
景綱、昔より源平兩家、天下の武將として、違敷の輩を討つに、兩家の郎等、大將を射ること、互にこれあり。同じ郎等ながら、公家にも知られまゐらせたる身なり。下藹の射る矢、立つか立たぬか、御覽ぜよ。」とて、よつ引いて射たれども、爲朝これを事ともせず、あはぬ敵と思へども、汝が詞の優しきに、矢一つ賜はらん、受けて見よ。かつは今生の面目、または後生の思出にもせよ。」とて、三年竹の節近なるを少しおし磨いて、山鳥の尾をもてはいだるに、七寸五分の丸根の篔篋中過ぎて、篔篋のあるをうちくはせ、暫し保つてひようと射る。眞先に進んだる伊藤六が胸板かけず射とほし、餘る矢が、伊藤五が射向の袖に裏かいてぞ立つたりける。六郎は矢にはに落ちて死にたりけ



の矢を見る兵ども、皆舌を振つてぞ畏れる。

ここに、安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行といふ

り。
伊藤五、この矢を折りかけて、大將軍の前に参つて、八郎御曹司の矢御覽候へ。凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死に候ひぬ。」と申せば、安藝守を始めて、こ



(本邊渡) 語物元保

かたかは破り

をこ

は、またなき剛の者、かたかは破りの猪武者なるが、さればとて、矢一筋に怖れて、向ひたる陣をひく事やある。たとひ、筑紫の八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよもとほらじ。五代傳へて、軍に遭ふこと十五箇度、我が手に取つても、度々多くの矢どもを受けし

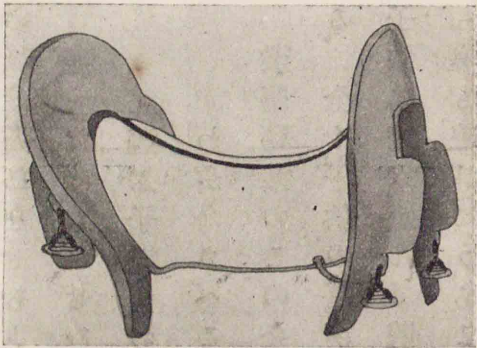


かど、未だ裏をばかぬものを。人々見たまへ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせん。」とて、かけ出づれば、をこの高名はせぬに如かず、無益なり。」と、同僚ども制すれども、もとよりいひつる言をかへさぬ男にて、夜あけて後に、傍輩の、いで八郎の矢目

一定
草摺

見んといはんには、何とかその時答ふべき。されば、日頃の高名も失せなんことの無念なれば、よしよし、人は續かずとも、おのれ證人に立つべし。」とて、下人一人相具して、門前に馬をかける。そのものにはあらねども、安藝守の郎等、伊賀國の住人山田小三郎伊行。生年二十八。公家にも知られ奉りし山田莊司行末が孫なり。山賊強盜を搦めとることは數を知らず。合戦の場にも、度々に及んで高名仕つたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや。」と申しければ、爲朝、「一定、彼奴は引き設けてぞいふらん。一の矢をば射させんず、二の矢を番はん所を射落さんず。」と宣ひて、かけ出でて、鎮西八郎是にあり。」と名のりたまふ所をもとより引き設けたる矢なれば、弦音高く切つて放つ。御曹司の弓手の草摺を縫ひ

ざまにぞ射切つたる。



馬の鞍

一の矢先射損じて二の矢を番ふる所を、爲朝よつ引いてひようと射る。山田小三郎が鞍の前輪より、鎧の草摺を、後輪かけて、矢先三寸餘りぞ射とほしたる。しばしは、矢にかせがれて、たまるやうにぞ見えし、即ち弓手の方へ眞逆さまに落つれば、鏃は鞍に留つて、馬は河原へ馳行けば、下人つと馳せより、主を肩にひき懸けて身方の陣へぞ還りける。寄手の兵これを見て、いよいよこの門へ向ふ者こそなかりけれ。

(保元物語)

北原白秋
詩人、歌人。
明治十八年筑
後柳河に生る。

九 遊 び

北原白秋

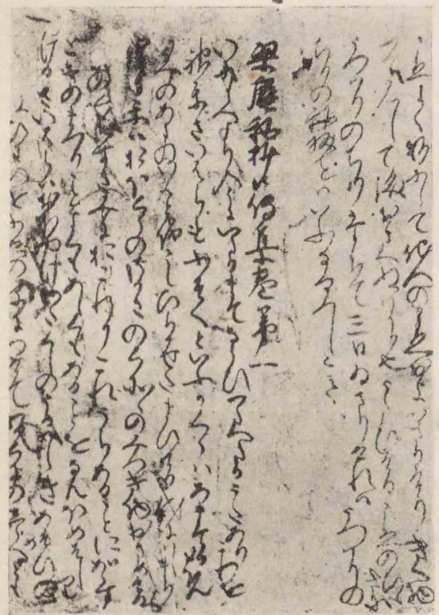
遊びをせむとやうまれけむ、
たはぶれせむとやうまれけむ。
遊ぶ子どもの聲きけば、
わが身さへこそゆるがるれ。

梁塵秘抄
後白河天皇の
御撰、諸ひ物
の集。

梁塵秘抄のこの今様は、まことに童の心に通うたものである。全く、子供の遊びを見てゐるほど、心の晴れるものはない。子供は遊ぶ、遊んで遊んで遊びほれる。子供が遊ぶ時には、身も魂も遊びにうちこんで了ふ。それが鬼ごつこにせよ、かくれんぼにせよ、心から遊び惚れてゐる子供を見てゐると、そこにはたゞ遊ぶそのものばかりしか見えない。そこには遊ぶ

三昧
澄入る

私心



抄 秘 塵 梁

子供のいのちばかりが、光物のやうに燃えあがるのみである。遊びの形などは目に入らない。全く見てゐる人の心までがうちゆらいでくる。さうなると遊びも尊い。三昧とは、この遊びの妙境に澄入ることである。

私心を去るがよい、
眞に童のやうになつてほればれと遊びほれたがよい。畢竟するに、藝術は遊びである。この童の遊びを更に深く更に高くし

たものである。

歌をつくるほどの人は、第一に歌の形を尊ぶとともに、その形の中に遊びほれる事が大切である。私達が歌の三昧に入りきつた時、歌の形は消える。ただ私達の命だけが輝き澄んで、そこに甚深微妙のしらべを心から心にと傳へてゆく。何とも云ひやうのない尊さに、しぜんと人の頭を垂れさせるものだ。要するに中味である。身も魂もうち込んでかかる事である。命がはちきれぬほど形を焼盡してしまふことである。いつまでもその形だけが人の目につくやうな歌は、下々の下品である。

(洗心雑話)

下品

一〇 諺 その一

藤井乙男

格言は、賢哲の垂訓にして、俚諺は、凡俗の信條なり。前者は、明かにその立言者を求め得べく、後者は、輿衆の聲にして、その作者を知るべからず。随うて、その發生の時期を精確に定めんこと頗る難しと雖も、多數の俚諺中には、間、その發生の時期、前後新古の關係變遷等を推測するを得べきものなきにしもあらず。

吾人が座談・演説等に日常使用する多數の諺は、吾人の祖先より智識的・道德的遺産の一部分として繼承せるものにて、吾人が新に製作したるものにあらず。有史以來、世々の人類が、内外諸種の天然人事に遭遇し、物に觸れ事に感じ、或は觀察し

輿衆

アリストテレ

(Aristoteles)
希臘の哲學者。
西曆紀元前三
全一三三)
ツレンチ
愛蘭の宗教家
言語學者にし
て詩を善くす。
(西曆一七七一
八六)



スレテスリア

或は考慮し或は感激し、喜怒哀樂種々雑多の經驗を積みて人生に普通なる智識を感得して、後世子孫に遺せる者、これ、即ち、今日行はるゝ諺の多數なり。「手軽にして受用し易きが爲に、滅亡の非運を免れし古智識の斷片なり。」とは、二千年の昔、僱
諺研究の率先者アリストテレス既
に之をいへり。ツレンチは、その俗
諺論に於て、今日文明諸國の共有財
産とも稱すべき諺は、各國民が祖先
傳來の遺産にして、或は口口に語り
繼ぎ、或は、前代の記者によりて後世に書き傳へられて、希臘、拉
典の古きより、中世の諺に至るまで、依然として今日に存し、諸
國に行はる。されば、近き世に起りたる諺ならんと一般に信

322 21 20 19
本 5 月 6 日

枕草紙

清少納言の隨
筆
土佐日記
紀貫之が土佐
より任滿ちて
歸京せし時の
海路の紀行。

載籍

ぜらるゝものにして、その淵源の極めて悠久なるを發見する
こと少からず。」といへり。現行はるゝ我が國の諺にも、そ
の發生時代の頗る遠きものあり。「痛む上に鹽塗る。」重荷に
小づけ。の如きは、既に、萬葉集に見え、一升舂に二升は入らぬ。
といふは枕草紙に出で、死ぬる子みめよし。「飯粒で鯛釣る。」
といふは、共に、早く土佐日記に見えたり。此等が、孰れも千年
内外の歴史を有するものならんとは、この諺を口にする人々
の、なべて豫想せざる所なるべく、今日にては、既に之を徵すべ
きものなしと雖も、その淵源の遠きこと、前數者に相譲らざる
もの、尙多かるべし。降りて鎌倉時代より室町時代に及べば、
現代のものと同なる諺の數、次第に多くなりゆくは、固より
いふ迄もなき事にて、鎌倉室町時代の載籍を通讀せし者の容

易に認め得る所なり。

祖先傳來の他に、外國より輸入せられたる諺あり。時としては、彼我相交換して、雙方同時に行はるゝより、孰れが借主にして、孰れが貸主なるか、容易に判別し難きもの亦少からず。四面海を環らし海東に屹峙せる我が國は、歐洲諸國の如く他國との交通自由ならず、人種言語の關係も、亦彼の如くならずるより、他國と諺を貸借交換して、その本主の誰なるかを判ずるに苦しむが如き患少しと雖も、支那・朝鮮との交通夙に開け、儒佛の教深く民俗に染みしより、内外典より來れる諺甚だ多く、一見して外國將來たるを認むべき者の他に、衣服外觀は純然たる國風ながら、なほ、その正體は、儒佛にあらずやと疑はるゝもの往々これあり。殊に、僧徒は、布教の必要上、經文中の金

内外典

將來

一丁字
合せものは

盛必有衰、合
會有別離。

仰向きて

惡人害賢
者猶仰天

而唾

蛙の面
蛙の面水

鹿の角を
鹿角

渴すれども
禪林句集

泉之水、熱
不飲

不レ息、患木之
蔭

麒麟も
文選

麒麟之衰也、
驚馬先之

(戰國策)

言を俗譯して、眼に一丁字なき善男善女を教化するより、その傳播極めて早く、廣く諺として世上に流布するに至る。「合せものは離れもの。」「仰向きて唾はく。」「蛙の面に水。」「鹿の角を蜂が螫す。」「の如き巧みに日本化せられたり。」「渴すれども盜泉の水を飲まず。」「麒麟も老いては驚馬に劣る。」「の類は、何人も一見して國産に非ざるを知るべきも、麻につるゝ蓬。」「井の中の蛙。」「情に刃向ふ刃なし。」「の如き、極めて通俗にして平易なるものが、佶偈なる儒教の語に胚胎せしものとは誰か思ふべき。」「壁に耳。」「といふも古き諺なれど、既に詩經に「君子無易由言、耳屬于垣」の語あり。拉典にも同一の諺ありて、それより汎く今日の歐洲諸國に分布せり。維新後、西洋諸國との交通盛にして、外國語を學ぶ者多きに

麻につる
蓬生^{スレバ}麻中^ニ
不^レ扶^テ而^直。
(荀子)
井の中の蛙
井^ノ電^{不^レレ}可^シ以^テ
語^ル於^テ海^ヲ者、
拘^ル於^テ虛^也。
情に及
(莊子)
仁者無^レ敵。
(孟子)

隨ひ、外國の諺の輸入せられしもの、またこれあり。「時は金。」
「習慣は第二の天性。」「二兎を追ふ者は一兎をも獲ず。」などの
類、即ち是なり。なほ、又、人の社會に立つや、生活上絶えず新經
験に遭遇し、知識上に道德上に、新なる自家の確信を生ずるや、
その經驗的所見を發表するに一種の文句を以てす。而して、
その文句にして、幸に諺たり得べき資格を具備する時は、一般
國民の贊同を博し、遂に、諺として成立すべき權利を享有する
に至る。

一國の俚諺は、生々蕃殖して窮期なきと共に、一方舊く行は
れて、既に國民の記憶を去りたるものはた少からず。此の如
く、舊を忘れ新を迎へて、俚諺は時代と共に増減變遷するもの
なり。

一一 諺 その二

藤井乙男

古來の典籍、殊に、その通俗的なるものは、幾多の諺をその中
に採録含蓄するのみならず、書中の佳句妙章は、往々世人に裁
斷割取せられて、恰も本來の諺なるかの如く使用せられ、時と
しては、漸次その語句を變更して、諺としての使用に便利なら
しむる餘り、一見、その出所を辨知し難きまで、相貌を變ずるに
至ることあり。和歌・俳諧・俗歌の類は、その形體短小にして、引
用にも記憶にも便利なるを以て、諺の如く使用せらるゝもの
多し。和歌より來れるものは例へば、

山川の末に流るゝ椽がらも
みすすててこそ浮む瀬もあれ

山川の
空也上人繪詞
傳に出づ。

思ふこと
後水尾院の御
製なりといひ
傳ふ。

救濟

室町時代の人。
連歌を以て名
あり。二條良
基の師たり。

冠里

安藤對馬守信
友の號なり。
奥州磐城平の
藩主。享保十
七年(三三〇)卒

千代

加賀の人。安
永四年(三三三)
歿す。

也有

横井氏、尾張
の人。天明三
年(三三三)歿す。

蓼太

大島氏、江戸
の人。天明七
年(三三七)歿す。

思ふこと一つ叶へば又二つ

三つ四ついつもむつかしの世や

の如き俳諧の附句及び俳句川柳より來れるものは例へば、

草の名も所によりて變るなり

浪花の蘆は伊勢の濱荻

物いへば唇寒し秋の風

初雪や彼も人の子樽拾ひ

百なりや蔓一すぢの心より

化物の正體見たり枯尾花

世の中は三日見ぬ間の櫻かな

大男總身に智慧がまはりかね

孝行をしたい時には親がなし

救濟

芭蕉

冠里

千代

也有

蓼太

の如きものは是なり。



王大-ダンサキレア

訓誡の意を含み、又は道義上の譬喩に供すべき詩歌俳句が、諺として用ひらるゝのみならず、偉人名士の語は、直ちに當時の人口に膾炙し、永く後世に傳誦せられて、俗諺と伍を同じう

するに至る。孔孟釋迦などの金言の如きは、いふも更なり、王彦章が「豹死留皮人死留名」といひ、歴山大王が波斯の大軍來り襲はんとするを聞き、自若として、「屠兒千羊を恐れず」といひ、家康が、五字七字の戒、うへをみな。みのほどをしれ。」の如き、一たび此等偉人傑士の口頭を出づれば、忽ち千萬人の間

王彦章
梁の人、字は
子名。
歴山大王
マケドニア王
ファイリポの子
(西暦紀元前
三五六-三三三)

定家
藤原俊成の子、
世に京極黃門
と稱す。仁治
二年(西暦一
一〇二)和歌に
す。和歌に詠
なしの語に出
歌大概に詠

揆

世故

一頭地を抜く

に傳唱通用せられ、永く世の諺となりて滅びず、定家が「和歌に師匠なし。」と教へ、芭蕉が之に倣ひて、「俳諧に古人なし。」と唱へたるが如き、前數者に比して適用の範圍稍狹しと雖も、名人の一語、世上の諺となるに至つては、その揆一のみ。
諺は、通俗をむねとすれども、必ずしも、凡人庸流の口にのみ出づと斷ずべからず。寧ろ、世故に長け、機智に富み、才識時俗を抜くこと一頭地なる者にして、始めて、痛切警拔なる人生の批評諷刺を擅にし得べきを記憶せざるべからず。「武士は食はねど高楊枝。」「花は櫻木、人は武士。」と高く標置し、「馬方、船頭、お乳の人。」「商人の空誓文。」と罵倒したるが如き、その立言者の地位如何を察するに難からざるなり。
○詩歌、格言等より來れる諺は、その發生の緣由一目瞭然たれ

出自

喧鬧

機轉

話柄

ども、此の如きは、無數の俚諺中極めて小部分にして、その大多數は、何時如何にして生ぜしか、生誕の時日も出自の父母も漠として知るべからざること、恰も車馬喧鬧の十字街頭に置き去りにせられたる棄兒の如し。幸にして、この兒、愛敬ありて人なつこく機轉利きたるより、衆人の愛顧を得、饑ゑず凍えず、無事に成長して世間に重寶がらるれども、人も我もその來歴如何を知る能はざるは、依然として、少しもありし昔に異ならざるなり。されば、諺の起源として世に傳へらるゝ話柄は、信據すべきもの極めて少く、諺の起源といはんよりは、寧ろ、諺の爲に、後日想像附會せしにあらずやと疑はるゝもの十の七八なり。さるを強ひて、之が起源を求めんとするは、猶棄子の系圖を作るが如く、所謂骨折損の草臥儲。たること多かるべし。

滋野貞融、通會字、岩下貞融、稱多門、山侯、濃國の號あり、信濃國の號あり、者、慶應三年學、歿、年六十七。

一二 讀書眼

滋野貞融

書見る眼は、たゞ明かならんことこそあらまほしけれ。一字の上にも、徒らに見過ぎず、そのあやに惑はず、うはべになづまず、その世その時のあるかたちを考へ合せて、底の心をあらはし、事の實を得んことは、眼あきらかならずして、いかでかは見るべき。かく、明かにせば明かならん眼なるを、その見ること紙の上に限りにて、その餘を見るに及ばず、あたら年月をふづくゑのもとに過し、ものらひろく見知りたりとも、何の益か

はある。さらん人は、見ずともあれかし。又、眼は明かに書はよく見る人の、その眼小く低くして、わが世のさかえをのみねがひて、この眼を大きく高くして、その得たらん事のよしを、千歳の後に傳へんものとしも思ひたらぬは、なかなか、書見ぬ方なんよろしかるべき。かゝれば、眼は、明かに大きく高かるべし。書函に眼するたらんと、鼻よりも高き眼を口わたりにつけたらんとは、かひなき文人にして、めしひのつらになんさだむべき。

(不繫舟)

夏目漱石
明治の文豪、
學者の名は金
之助、東京の
人、東大英文
科出身、大正
五年、年五
十。

安部君
安部能成。

一三 ケーベル先生 (自修文) 夏目漱石



ケーベル先生

木の葉の間から高い窓が見えて、その窓の隅からケーベル先生の頭が見えた。傍から濃い藍色の煙が立った。「先生は煙草を呑んでゐるな。」と余は安部君に云つた。此の前此處を通つたのは何時だか忘れてしまつたが、けふ見ると僅かの間にもう大分やうすが違つてゐる。甲武線の崖上は軒並新しい立派な家に建てかへられて、何れも現代的日本の産み出した富の威力と切放す事の出来ない門構ばかりである。其の中に、先生の住みだけが、過去の記念の如く、たつた

一軒古ぼけたなりで残つてゐる。先生は、この燻ぶり返つた家の書齋にはひつたなり、滅多に外へ出た事がない。其の書齋は取もなほさず、先生の頭が見えた木の葉の間の高い所であつた。

余と安部君とは先生に導かれて、敷物も何も足に觸れない素裸の儘の高い階子段を薄暗がりになが／＼いはせながら上つて、階上の右手にある書齋に入つた。さうして先生の今迄腰をおろして窓から頭だけを出してゐた一番先に近い椅子に余は坐つた。そこで外面から射す夕暮に近い明りを受けて、始めて先生の顔を熟視した。先生の顔は、昔とさまで違つてゐなかつた。先生は自分で六十三だと云はれた。余が先生の美學の講義を聴きに出たのは、余が大學院にはひつた年で、慥か先生が日本へ來て始めての講義だと思つてゐるが、先生は其の時からすでにかういふ顔であつた。先生に、日本へ

オーバーン
(auburn)
赤褐色の

來てもう二十年になりますか」と聞いたなら、「さうはならない、たしか十八年目だ。」と答へられた。先生の髪も髯も英語でいふとオーバーンとか形容すべき、ごく薄い麻のやうな色をしてゐる上に、普通の西洋人の通り非常に細くつて柔かいから、少しの白髪が生えても丸で目立たないのだらう。それにしても血色が元の通りである。十八年を日本で住み古した人とは思へない。

先生の容貌が、永久にみづ／＼してゐるやうに見えるのに引きかへて、先生の書齋は毫けきつた色で包まれてゐた。洋書といふものは、唐本や和書よりも裝飾的な背皮に、學問と藝術のはでやかさを偲ばせるが常であるのに、此の部屋は、余の眼を射る何物をも藏してゐなかつた。たい大きな机があつた。色の褪めた椅子が四脚あつた。マツチと埃及煙草と、灰皿があつた。余は埃及煙草を吹かしながら

唐本
支那から舶來
の書物。

先生と話をした。けれども部屋を出て、下の食堂へ案内される迄、余は遂に先生の書齋にどんな書物がどんなに竝んでゐたかを知らずに過ぎた。

花やかな金文字や、赤や青の背表紙が、余の眼を刺激しなかつたばかりではない。純潔な白色でさへ、遂に余の眼には觸れずに濟んだ。先生の食卓には、常の歐洲人が必需品とまで認めてゐる白布が懸つてゐなかつた。其の代りに、くすんだ更紗形を置いた布が一杯に被さつてゐた。さうして其の布は、此の間まで余の家に預つてゐた娘の子を嫁づける時に新調して遣つた布團の表と同じものであつた。此の卓を前にして坐つた先生は襟も襟飾も着けてはゐない。千筋の縮みのシャツを着た上に、玉子色の薄い背廣を一枚無造作に引掛けただけである。始から儀式ばらぬやうにとの注意ではあつたが、

あまり失禮に當つてはと思つて、余は白いシャツと白い襟と紺の着物を着てゐた。「君が正装をしてゐるのに私はこんな服で」と先生が最前云はれた時、正装の二字に痛み入るばかりであつたが、成程洗ひ立ての白いものが手と首びに着いてゐるのが正装なら、余の方が先生よりも餘程正装であつた。

余は先生に、「一人で淋しくありませんか。」と聞いたら、先生は、「少しも淋しくはない。」と答へられた。「西洋へ歸りたくはありませんか。」と尋ねたら、「それ程西洋が好いとも思はない、併し日本には演奏會と芝居と圖書館と畫館がないのが困る、それだけが不便だ」と云はれた。「一年位暇を貰つて遊んで來てはどうです。」と促して見たら、「そりや無論遣つて貰へる、けれどもそれは好まない。私がもし日本を離れる事があるとすれば、永久に離れる。決して二度とは歸つて來ない。」と

云はれた。

先生はかういふ風に、それほど故郷を慕ふやうすもなく、あながち日本を嫌ふ氣色もなく、自分の性格とは容れ悪い程に矛盾な亂雜な空虚にして安つばい、所謂新時代の世態が、周圍の過渡層の底から次第に浮き上つて、自分を其の中心に陥落せしめねばやまぬ勢を得つゝ進むのを、日毎眼前に目撃しながら、それを別世界に起る風馬牛の現象の如く餘所に見て、極めて落付いた十八年を吾邦で過された。先生の生活は、そつと煤烟の巷に棄てられた希臘の彫刻に血が通ひ出した様なものである。雜鬧の中に己を動かして、如何にも靜かである。先生の踏む靴の底には、敷石を噛む鉄の響がない。先生は、紀元前の半島の人の如くに、しなやかな革で作つたサンダル sandalsを穿いて、おとなしく電車の傍を歩いてゐる。

過渡
舊狀態から新
狀態に移る中
間の狀態。

風馬牛
無關係

雜鬧
混雜

サンダル
(sandals)
上靴、上草履。

ボ
 (Edgar Allan
 Poe)
 一八一九年
 アメリカの詩
 人、短篇作家。
 ホ
 フマン
 (Hofmann)
 一八三〇年
 ドイツの神學
 者、エルラン
 ゲン大學教授。

スケプチック
 (ske, tic)

先生は昔鳥を飼つて居られた。何處から來たか分らないのを餌を遣つて放し飼にしたのである。先生と鳥とは妙な因縁に聞える。此の二つを頭の中で結び付けると、一種の氣持が起る。先生が大學の圖書館で、書架の中からボアの全集を引きおろしたのを見たのは昔の事である。先生はボアもホフマンも好きなのだといふ。此の夕、その鳥の事を思ひ出して、「あの鳥はどうなりましたか。」と聞いたら、「あれは死にました凍えて死にました、寒い晩に庭の木の枝にとまつたまま、翌日になると死んでゐました。」と答へられた。

鳥のついでに蝙蝠の話が出た。安部君が「蝙蝠は懷疑な鳥だ。」と云ふから「何故」と反問したら、「でも薄暗がりにはたくと飛んでゐるから。」と謎のやうな答をした。余は「蝙蝠の翼が好きだ。」と云つた。先生は「あれは悪魔の翼だ。」と云つた。成程晝にある悪魔は何時でも蝙蝠

の羽根を背負つてゐる。

其の時、夕暮の窓際に近く、蝸が來て、朗らかに鋭い聲を立てたので、卓を圍んだ四人は、しばらくそれに耳を傾けた。「あの鳴聲にも伊太利の聯想があるでせう。」と余は先生に尋ねた。是は先生が少し前に「蜥蜴が美しい。」といつたので、青く澄んだ伊太利の空を思ひ出させやしませんか。」と聞いたら、「さうだ。」と答へられたからである。併し蝸の時には、先生は少し首を傾けて、「いや、彼は伊太利ぢやない。どうも伊太利では聞いた事がないやうに思ふ。」と云はれた。

余等は熱い都の中心に誤つて點ぜられたとも見える古い家の中で、靜かにこんな話をした。それから菊の話と椿の話と鈴蘭の話をした。果物の話もした。其の果物の中で、最も香りの高い遠い國からきたレモンの露を搾つて水に滴らして飲んだ。珈琲も飲んだ。



レモン

鈴蘭

「凡ての飲料のうちで珈琲が一番旨い」といふ先生の嗜好も聞いた。それから静かな夜の中に安部君と二人で出た。

先生の顔が花やかな演奏會に見えなくなつてから、もう餘程になる。先生はピアノに手を觸れる事すら日本に来ては口外せぬつもりであつたといふ。先生はそれほど浮いた事が嫌なのである。凡ての演奏會を謝絶した先生は、たゞ自分の部屋で自分の氣に向いたときだけ、樂器の前に坐る。さうして自分の音樂を自分だけで聞いてゐる。その外にはたゞ書物を讀んでゐた。

文科大學へ行つて、此處で一番人格の高い教授は誰だ」と聞いたたら、百人の學生が九十人迄は、數ある日本の教授の名を口にする前に、まづ「フォン、ケーベル」と答へるだらう。かほどに多くの學生から尊敬される先生は、日本の學生に對して終始渝らざる興味を抱いて、十八

索寞
さびしい

年の長い間、哲學の講義を續けてゐる。先生が疾くに索寞たる日本を去るべくして、未だに去らないのは、實に此の愛すべき學生あるが爲である。

京都の深田教授が、先生の家にゐる頃、何時でも閑な時に晚餐を食べに來い。」と云はれてから、行かずに経過した月日を數へると、もう四年以上になる。漸く其の約を果して、安部君と一所に大きな暗い夜の中に出た時、余は先生は是から先もう何年位日本に居る積りだらうと考へた。さうして一度日本を離れ、ばもう歸らないと云はれた時、先生の引用した「no more, never more」といふポーの句を思ひ出した。

(漱石全集)

深田教授
深田康實、京
都帝國大學教
授。

中

芥川龍之介

小説家、明治二十五年東京橋本に生る、東京大英文科出身、昭和二年、年三十六。 華山 渡邊華山、天保十二年自死す、年四十九。 馬琴 嘉永元年歿、年八十二。

不純な雑音

一四 戲作三昧

芥川龍之介

華山が歸つた後で、馬琴はまだ残つてゐる興奮を力に、八犬傳の稿をつぐべく、何時ものやうに机へ向つた。先を書きつづける前に、昨日書いた所を一通り讀返すのが、彼の昔からの習慣である。そこで彼は、今日も、細い行の間へべた一面に朱を入れた。何枚かの原稿を、氣をつけてゆつくり讀返した。すると、何故か書いてある事が、自分の心もちとぴつたり來ない。字と字との間に、不純な雑音が潜んでゐて、それが全體の調和を到る所で破つてゐる。彼は最初それを、彼の痛が昂ぶつてゐるからだとして解釋した。
「今の己の心もちが悪いのだ。書いてある事は、どうにか書

きされる所まで、書ききつてゐる筈だから。」

さう思つて、彼はもう一度讀返した。が、調子の狂つてゐることは、前と一向變りはない。彼は老人とは思はれない程、心の中で狼狽し出した。

「このもう一つ前はどうかだらう。」

彼は、その前に書いた所へ眼を通した。すると、これも亦徒らに粗雑な文句ばかりが、糅然としてちらかつてゐる。彼は更にその前を讀んだ。さうして又その前の前を讀んだ。

しかし讀むに従つて拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して來る。そこには何等の映像をも與へない叙景があつた。何等の感激をも含まない詠歎があつた。さうして又、何等の理路を辿らない論辯があつた。彼が數日を

糅然 布置 映像 理路

饒舌

費して書上げた何回分かの原稿は、今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は、急に、心を刺されるやうな苦痛を感じた。

「これは始から、書直すより外はない。」

彼は心の中でかう叫びながら、忌忌しさうに原稿を向うへつきやると、片肘ついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で、弓張月を書き、南柯夢を書き、さうして今は八犬傳を書いた。

この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎮、臺の形をした銅の水差し、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立て——さういふ一切の文房具は、皆彼の創作の苦しみに、久しい以前から親しんでゐる。それらの物を見

端溪の硯
支那の端溪か
ら出る硯

比倫

るにつけても、彼は自ら今の失敗が、彼の一生の勞作に、暗い影を投げるやうな——彼自身の實力が根本的に怪しいやうな、忌はしい不安を禁じる事が出来ない。

自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりであつた。が、それもやはり事によると、人竝に己惚れの一つだつたかも知れない。

かういふ不安は、彼の上に、何よりも堪難い、落莫たる孤獨の情を齎した。彼は、彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜である事を忘れるものではない。が、それ丈に又、同時代の屑屑たる作者輩に對しては、傲慢であると共に飽迄も不遜である。その彼が、結局自分も彼等と同じ能力の所有者だつたと云ふ事を、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたと云ふ事

屑々

遼東の豕

は、どうして安安と認められよう。しかも彼の強大な我は、悟り」と諦め」に避難するには餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は、机の前に身を横へた儘親船の沈むのを見る、難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜に絶望の威力と戦ひつづけた。もしこの時、彼の後の襖が、けたたましく開放されなかつたら、さうして「お祖父様唯今。」といふ聲と共に、柔かい小さな手が、彼の頸へ抱きつかなくなつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、何時までも鎖されてゐた事であらう。が、孫の太郎は、襖を開けるや否や、子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上つた。

「お祖父様唯今。」

「おお、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に、八犬傳の著者の皺だらけな顔には、別人のやうな悦びが輝いた。

茶の間の方では、瘤高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が賑かに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から倅の宗伯も歸り合せたらしい。太郎は、祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顔をして天井を眺めた。外氣にさらされた頬が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが、息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅の小さな紋附を著た太郎は、突然かう云ひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、



糸鬢奴

髷が何度も消えたり出来たりする。——それが馬琴には、自ら微笑を誘ふやうな気がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日？」

「御勉強なさい。」

馬琴はとうとう噴出した。が、笑の中で直ぐ又語をつぎながら、

「それから？」

「それから——ええと——癩癩を起しちやいけませんつて。」

「おやおや、それつきりかい。」

「まだあるの。」

太郎はかう云つて、糸鬢奴の頭を仰向けながら、自分も亦笑

糸鬢奴

ひ出した。眼を細くして、白い齒を出して、小さな髷をよせて、笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて、世間の人間のやうな憐むべき顔にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は、幸福の意識に溺れながら、こんな事を考へた。さうしてそれが、更に又彼の心を擦つた。

「まだ何かあるかい？」

「まだね、いろんな事があるの。」

「どんな事が？」

「ええと——お祖父様はね、今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりますから？」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつともつとようく辛抱なさいつて。」

「誰がそんなことを云つたのだい。」

太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ？」

「さうさな。今日は御佛參に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、顚を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「淺草の觀音様がさう云つたの。」

かういふと共に、この子供は、家内中に聞えさうな聲で、嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛退いた。さうして、うまく祖父をかついだ面白さに小さな手を叩きながら、ころげるやうにして、茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に、嚴肅な何物かが、刹那に閃いたのは、この時である。彼の唇には、幸福な微笑が浮んだ。それと共に、彼の眼には、何時か涙が一はいになつた。この冗談は、太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふ所では

かつぐ

ない。この時、この孫の口から、かういふ語を聞いたのが、不思議なのである。

「観音様がさう云つたか、勉強しろ、癩癩を起すな、さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。

その夜の事である。

馬琴は、薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は、家内のものも、この書齋へは、はひつて來ない。ひっそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀の聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。



圓行燈

神來の興

始筆を下した時、彼の頭の中には、かすかな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と、筆が進むのに従つて、その光のやうなものは、次第に大きさを増して來る。經驗上、その何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意をして、筆を運んで行つた。神來の興は、火と少しも變りがない、起す事を知らなければ、一度燃えても、すぐに又消えてしまふ……

「あせるな、さうして出來るだけ深く考へろ。」

馬琴はややもすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分に囁いた。が、頭の中にはもうさつきの星を碎いたやうなもの、川よりも早く流れてゐる。さうしてそれが刻々に力を加へて來て、否應なしに彼を押しやつてしまふ。

彼の耳には、何時か、蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の眼に

神人

も、圓行燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生じて、一氣に紙の上を迂りはじめた。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書きつづけた。

滾滾

頭の中の流は、丁度空を走る銀河のやうに、滾滾として何處からか溢れて来る。彼はその凄じい勢を恐れながら、自分の肉體の力が萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして、堅く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。
「根かぎり書きつづける。今己が書いてゐる事は、今でなければ書けないことかも知れないぞ。」

澎湃

しかし光の靄に似た流は、少しもその速力を緩めない。反つて目まぐるしい飛躍の中にあらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲つて来る。彼は遂に全くその虜になつた。

毀譽

さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

この時、彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を拂つて消えてしまつた。あるのは、唯不可思議な悦びである。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作者の嚴かな魂が理解されよう。ここにこそ、人生は、あらゆるその殘滓を洗つて、まるで新しい鑽石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか……(井川龍之介集)

味到

殘滓

安倍野

攝津國東成郡
にあり天王
寺の南一帶の
地。

渡邊の橋

今の天満・天
神橋の間に架
れりきといふ。

引く
色代

一五 正行参内

安倍野の合戦は霜月廿六日のことなれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱替へさせて身を暖め、藥を與へて疵を療せしむ。此の如く、四五日皆勞りて、馬に乗る者には馬を引き、物具失へる人には物具をきせて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感じずる人は、今日より後、心を通ぜんことを思ひ、その恩を報ぜんとする人は、やがて彼の手に屬して後、四條繩手の合戦に討死をぞしける。

兩度の合戦

一は、この年八月、正行が細川顯氏を河内藤井寺に破れる戦。一は、十一月の安倍野の戦。

將軍
尊氏。

左兵衛督
弟直義。

庭弱

にありて
にて

さても今年兩度の合戦に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵のために犯し奪はれ、遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章たゞ、熱湯にて手を濯ふが如し。今は、末々の源氏國々の催勢などを向けては、叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢、雲霞の如く、淀八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族打連れて、十二月廿七日、芳野の皇居に参じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、庭弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休め参らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致す所、かねて思ひ定め候ひけるかによりて、遂に、攝州湊川にして討死仕り

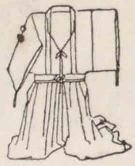
をはんぬ

手を碎く

有待

候ひをはんぬ。その時、正行十一歳に罷りなり候ひしを、合戦の場へは伴なはで、河内へ歸し、死残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に即けまゐらせよと申し置き候。然るに、正行、正時已に壯年に及び候ひぬ。この度、我と手を碎き、合戦仕り候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略のいひがひなきに落つべくおぼえ候。有待の身、思ふに任せぬ習にて、病に犯され早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父のためには不孝の子となるべきにて候間、今度、師直、師泰に懸り合ひ、身命を盡し合戦仕りて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候か、正行、正時が首を彼等に取りられ候か、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて、今一度、君の龍顔を拜し奉らんために、参内仕りて候。」と申しもあ

直衣



度

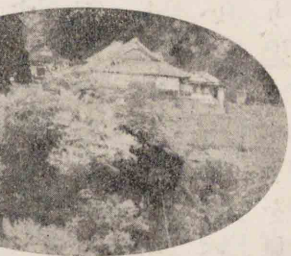
股肱

へず、涙を鎧の袖にかけて、義心、その氣色にあらはれければ、傳奏、未だ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞぬらされける。主上、南殿の御簾を高く捲かせ給ひ、玉顔、殊に麗しく、諸卒を照臨ありて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮、先づ憤を慰する條、累代の武功、返す返すも神妙なり。大敵、今勢を盡して向ふならば、今度の合戦、天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずることは、勇士の心とする所なれば、今度の合戦、手を下すべきにあらずといへども、進むべきを知りて進むは、時を失はざらんがためなり、退くべきを見て退くは、後を全うせんがためなり。朕、汝を以て股肱とす、慎んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの敕答に及ばず、たゞ、之を最後の

過去帳

逆修

參内なりと思ひ定めて退出す。



如意輪堂

正行正時和田新發意、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に参りて、今度の軍難儀ならば、討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書連ねて、その奥に、返らじとかねて思へばあづさ弓

と一首の歌を書留め、逆修のためと思しくて、各鬢髪を切りて佛殿に投入れ、その日、吉野を打出でて敵陣へぞ向ひける。

(太平記)

大高源吾

淺野長矩に事
なへて申小姓と
なり、膳番元
方、金奉行、元
腰方等兼
ねたり。
元禄十五年九
月五日源吾よ
り母に贈れる
書面。

そもじ

一六 永訣狀

大高源吾

一、私事、今度江戸へくだり申候存念、豫ても御物語り申上候通り、殿様御憤を存じ奉り、御家の御恥辱を雪ぎ申度一筋に御座候。かつは、侍の道をも立て、忠のため命を捨て、先祖の名をも顯し申度御座候。勿論大勢の御家來にて御座候へば、如何ほども御厚恩の侍も御座候處、さしての御懇意にも遊ばし下されざる人並の私儀にて御座候へば、この節大抵に忠をも存じ、存へ候て、そもじ様御存命の間は御養育仕り罷在候ても、世の謗もあるまじき吾等にて御座候へども、御側近き御奉公相勤め、御尊顔拜し奉り候朝暮の儀、今以て片時も忘れ奉らず候。誠に、大切なる御身を捨てさせられ、忘れ難き御家をも思召し

はなされ、御鬱憤遂げられ候はんと思召し詰められ候相手を討ち損ぜられ、剩へ、淺ましき御生害遂げられ候段、御運の盡きられ候とは申しながら、無念至極、恐れながらその時の御心底

元禄五年
九月
御座候

大高源吾筆蹟

仕置

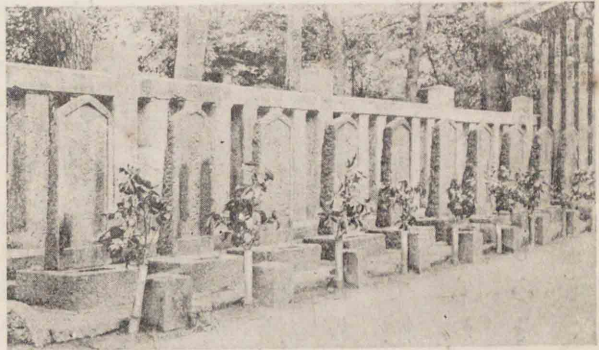
推量り奉り候へば、骨髓に徹り候て、一日片時も安き心御座なく候。されども、御短慮にて、時節と申し處と申し、一方ならぬ不調法ゆゑ、天下の御憤深く御仕置に仰付られ候事に御座候

趣意

へば、力及び申さぬ事、全く天下へ御恨申上ぐべき様御座なく候儀にて御座候故、御城は子細なくさし上げたる事に御座候。これ、天下に對し奉り候て、異議を存じ奉り申さぬ故にて御座候。併し、殿様御亂心に御座なく、上野介殿に御趣意御座候由にて、御切つけなされたる事にて候へば、その人はまさしく敵にて候。主人の命を捨てられ候程の御憤御座候譬を、安穩にさしおき申すべき様、昔より唐土我が朝共に武士の道にあらぬ事にて候。それゆゑ、早速敵の方へとりかけ申すべく候處、大學様御閉門にて候へば、御免なされ候時分、もしや、殿様御跡少しにても仰付られ、上野介殿方へも何卒品もつきて、大學様外聞よく世間もあそばし候やうにも罷成候はば、殿様こそ右の通に候とも、御家は残り申候事にて候。然れば、我等出家沙

大學様
淺野長矩の弟
長廣。
閉門

沙門



源 吾 の 墓 (左ヨリニツ目)

門ともなり、または自害仕候ても、憤は休め候はんと、この節まで口惜しき月日をも送り候所に、そのかひなく、安藝國へ御座なされ候。閉門御救しと申す名ばかりにて御座候。年月過ぎ候はば、何とぞ御世に出でさせられ候事も御座あるべく候はんか。よし左様に御座候とても、この節にて殿様御跡は絶え申したる事に御座候へば、この上前後を見合せ申候は、臆病の仕る所、武士の本意ならぬ事にて御座候。この上にも天下へ御訴訟申上、何とぞ相手へ御手當も下り、大學

徒黨

様にも世間廣く御取立遊ばされ下され候様に、一命にかけて御嘆き申上、是非御取上之なく候はば、その時は、相手方へ取かけ申すべき由、頻りに相談の衆も御座候。尤も一理御座候様には候へども、中々左様の徒黨がましき事仕るべき道理と存じ申さず。その上御願ひ申上、御取上御座なきに付、相手へ取かゝり申候段、偏に天下へ御恨み申上候にひとしく御座候。然れば、以ての外の儀、大學様始め、御一門の方々様までも、御爲宜しからぬ事にて候ゆる、唯一筋に殿様御憤をはらし奉り候より外の心御座なく候。

一段々右申上候ごとく、武士の道を立て候て、御主の讐を報い申すまでにて、全く天下へ對し奉り御恨み申上候にても御座なく候。然れども、如何なる思召御座候て、天下へ御恨申上

下知

下知

か
い
出

下知

九
十
部
よ
ね

我々兄弟
源吾及び弟小
野寺幸右衛門
秀富
冥利
首尾

同前とて我も...
げたるも同前とて、我々どもの親妻子御崇り御座候とても、力
及び申さず候。萬一、左様の事になり候はば、かねて仰せられ
候通、何分にも上よりの御下知の如く、尋常に御覺悟なさるべ
く候。御はやまり候て、御身を我と御あやまちなされ候こと
など、吳々も有るまじき御事にて候ま、必ず、左様に御心
得なされ度候。世の常の女の如く、彼此御嘆の色も見えさせ
られ、愚におはしまし候はば、いかばかり氣の毒にて、心もひか
れ候はんを、さすが常々の御覺悟ほど御座なされ候て、思召し
切り、反りてけなげなる御勸にも、預り候御事、扱々今生の仕合
未來の喜、何事かこれに過ぎ申し候はんや。天晴、我々兄弟は、
侍の冥利に叶ひ申したる儀と、淺からぬ本望に存じ奉り候。
先々の首尾の程、御心に懸けさせらるまじく候。私三十一、幸

九十郎
岡野秀包、源
吾の甥
金札

いかう

法體

右衛門二十七、九十郎二十三、孰れも究竟の者どもにて候。容
易く本望を遂げ、亡君の御心をやすめ奉り、未來閻魔の金札の
土産にそなへ申すべく候ま、御心安く思召した、御息災に
て何事も時節を御待ちなさるべく候。御齡もいかう御傾き、
幾程あるまじき御身に、嘸心細く、便もあらぬ御方に、乏しく月
日を御凌ぎ遊ばし候はんと存じ奉り候へば、いかばかりか心
憂く候へども、その段力及び申さず候。唯、幸に、御法體の御身
にて候へば、この後、いよいよ以て、佛の御勤のみにて、うさもつ
らさも御まぎれましまし、未來の事朝夕に御忘れなく、世も穩
かに御座候はば、寺へも節々御参り遊ばされたく、一つは御歩
行御養生ともなり申すべく候。乳母にもあきらめ候やうに、
よく仰せられたく候。かしこ。

森林太郎
醫學博士、島根縣
の一人、大正十
三年、年六十
三。
まがねなす

一七 乃木將軍

森林太郎

つはものの	武勇なきには	あらねども、
まがねなす	ペトンに投ぐる	人の肉。
往くものは	生きて還らぬ	強襲の
鋒を	しばし轉じて、	右手のかた、
圖上なる	標のたかさ	二零三、
巔の	ふたつ聳ゆる	石やまに、
たえだえの	望のいとを	かけてこそ、
きのふけふ、	軍の力を	向けてしか。
霜月の	三十日の	夕まぐれ、

明治三十七年。

高崎山
旅順の西北約
二里の處にあ
り。
柳樹房、曲家屯
俱に、旅順の
北約三里の處
にあり。

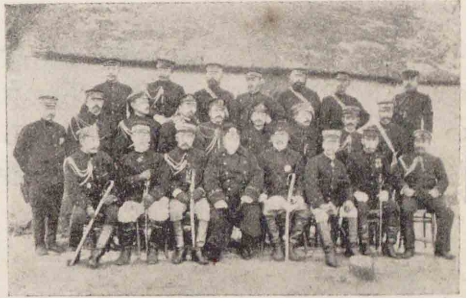
そびら

まなご

將軍は	高崎山の	師團より、
たゞ一騎、	柳樹房なる	本營に
歸らんと、	曲家屯をぞ	過ぎたまふ
ほの暗き	道のほとりを	見たまへば、
身うち皆	血に塗れたる	卒ありて、
そびらには	はやこときれし	將校の
なきがらを	かきのせてこそ	立てりけれ。
「汝は誰ぞ。」	「 <u>そ</u> を何處にか	負ひてゆく。」
「きこしめせ。」	背負ひまつるは、	奴わが
主と頼む	乃木將軍の	まなごなり。
年老いし	將軍の家の	二人子、

一七 乃木將軍

南山
金州半島中、
灣の最も大連
の間に在る處



旅順攻圍中の乃木將軍と僚僚

さついで頃
友安
陸軍少將友安
治延。

わが主をも、
『討死の
葬をば
給ひしを、

そのひとり
いちはやく
うたれ給ひて、
弟の
ひとりのみ。
その一人子の
父君は、
隊附の
身の果は、
ひと時に
さいつ頃、
勝典ぬしは、
南山に
残れるは
保典のぬし
背負へるは、
なきがらぞ。
心を、しく、
まゝにあらせて、
おのれと三人、
營め。」と宣り
友安旅團の

あさけ

あた

副官に
このあさけ、
なりましぬ。



二〇三高地

職かはり、
あへなくも
まだ程經ぬに、
空しき骸と
果てましし
二零三。
あたの備を
うら若き
うち貫かれ、
のたまはん
持口の
うせたまふ。
處は高地
目鏡もて
望みます
額のたゞ中
ひと言を
ひまもなく、
南の峯に
その骸を

くるほし

かはたれ時

ゆ

更闌く

奴背負ひて、

野戦病院

心からにや

駒をとめて

病院の旗

「彼方にこそ。」と

かはたれ時に

雲の絶間ゆ

まだ輝かぬ

友なる星に、

動かざりき。」と

この村に

たづぬれど、

たづねえず。」

聞きましし

あるかたを、

さし給ふ。

見えねども、

視ひし

冬の星、

「將軍の

語りけり。

ありときく

くるほしき

かくいふを

將軍は、

鞭あげて、

面ざしは

目ざとくも、

さむ空に

更闌けて、

睫毛だに

(うた日記)

姉崎正治
朝風と號す、
文學博士、東京
帝國大學文學
部教授。

傳奇的

一八九 邦人の性格



姉崎正治

姉崎正治

わが日本民族、古來感情に富むを以て著し。感情の激する所、往々爲し難き事を爲し、收め難きの功を收めたることなきにあらず。わが國史の花は、一に、民族の感情發動に成りしものなり。その歴史の傳奇的に華麗にして、また、美術的に情致あるは、このためなり。最も感情的に熱血的なるわが民族は、また、最も

親親親

親昵

涅齒

落飾

落飾

涅齒

親昵

然此

喜怒哀樂の變化に富み、怒つては、威嚴十萬の醜虜を退けたる大將軍も、笑つては、溫容稚兒をも親昵せしめたり。山なす敵陣を望みて、馬蹄の塵と睥睨したる關東の荒武者も、白面涅齒花の如き平家の公達を殺しては、悲嘆の涙抑へ難く、黒谷の禪房に落飾して、一生を念佛に送りしにあらずや。發しては、千峰の雪と見まがふ吉野の萬朶の櫻は、實にわが民族の粹なる武士の理想なりき。

然れども、熱血的感情的なるものは、即ち外來の事物に感動し易きなり。運命の轉變に對して、最も喜び、また、悲しみ易きなり。此に於て、最も感情に富むわが日本民族は、また、最も運命に退讓し易き國民たるに至れり。これを最も親易きの例に取るも、一死君國に盡すの心に至りては、わが民族の最も他

禍神

一八 邦人の性格

に向つて誇るべき所、しかも、一度意の如くならざらんか、君國のためには、千辛萬苦に耐へ、再舉してその目的を達せんとはせず、却つて、櫻花の小夜嵐に吹散ると同じく、華華しく死して餘塵を留めざらんと務むるもの、比々として皆然るにあらずや。戰一たび利あるや、士氣奮躍、百難を苦とせず、敵を鑿にせんとするも、事一たび敗るゝや、速かに死を決して、一軍一族、城を枕に自盡するを名譽とす。

此の如く、熱情的なる日本民族は、往々にして運命に翻弄せられ、泣きては笑ひ、喜びては悲しみ、受動的に運命の支配を受けて激發するも、活動的に、毅然不屈、外來の運命に反抗し、これと健闘して以てこの強敵を壓倒せんことを知らず。順境に處しては、天神幸を我に降すと謝するも、一度逆境に陥れば、禍

禍

下

一八 邦人の性格

下

血

熱

男

完

101

101

101

101

101

101

101

観す
安立

神の災厄終に免るべからずと觀じ了らんとす。喜悲交、來り、順逆轉化するの間に安立する所なく、随つて、豫言的の大希望を抱きて、浮世の波濤に對抗せんとせず、目前の禍福に目眩し心激し、ために高大永遠なる彼岸の光明を望んで勇往邁進するの氣象なし。これ、わが民族性格上の一大缺點にあらずや。この性格のために、わが國家が、幾何の進運を害し、幾何の強度を損するかを想へば、國を憂ふる者の一日も默視する能はざる所なり。

山
山
山

(復活の曙光)

熙成の皇子
後村上天皇の第
二皇子・後龜山
天皇
殿上人

實爲中將
藤原實村の男。

啓す

一九
そら行力

熙成の皇子、いまだ幼うおはしましける時に、若き殿上人數多、伴なはせたまひて、萊摘河の河淀の邊にて、鷹つかはせて御覽ありけるに、傍にいと大きな岩のえもいはず面白きに、松の生ひ出でたるありけり。皇子御覽じて、「この岩を歸りなむ時、皇居の御庭にもてまわれ、上に奉らん。」と、實爲中將にのたまひければ、幼き御心を推しはかりて、みことうけしたまふ。鳥など數多とりて、歸らせたまへる時に、侍從に、「岩を忘れたまはじ。」とのたまひければ、民部大輔が、力も強く侍れば、御後よりもて参り候ふなり。」と啓して、さて皇居にかへりいらせたまふ。

大橋
なむ
なむ
なむ
なむ
なむ
なむ

御鷹の鳥など奉らせたまひて、實爲中將に、ありつる岩を。」と召させたまふに、侍従こそ仰言を承りつれ。」と啓したまへば、侍従を召して、いかに。」と尋ねさせたまふ。「民部大輔の御後よりもて來んといひ侍るを、民部を召させたまひなむ。」と啓すれば、誠に面白からん岩こそ見まくほしけれ。民部の力強ければ、必ずもて來なん。」とのたまふ。

中將立ちかへりたまひて、民部大輔に、かゝることなむある、いかがせん。」とのたまへば、すべきことこそあれ。」とて御庭にありける、小き岩に、松の枝をとりつけて、中將といと重げに持ちて、宮の御前にする奉れば、これは、いと小くこそあれ。それには、あらじ。」とむつからせたまひければ、民部大輔の、さればこそ、その岩を持ちて、上の山を通り候ひしに、右左山のさし

むつかる

ただよふ

出でて、道のいと狭き處にて、かなひ難く、いかにせんとただよひ侍りしに、むかひの方より山伏の來りけるが、岩にせかれて

然者於向後を併、
寫中

擬心本可憐毛鏡者也

應永九年十月十五日

後龜山天皇宸筆

注子細矣 太上天皇親成

然者於

通られぬなり。のけたまへ。」との、しりける程に、「われもせん方なさに、かくて侍り。」とわぶれば、さらばすべき事こそあれと

せめて

て數珠をおしもみ、何やらん、つぶやきて祈るに隨ひて、この岩
 小くなりて、やすやすと通りて侍りし程に、山伏も行き過ぎし
 を、呼びかへして、「もとの如く祈りなほしてよ。」といひければ、「ま
 た、ゆく先に細き道のあらんに、いかがしたまはん。」といひし程
 に、げにもと思ひ侍りて、そのまゝもて参りぬ。」といひたまへ
 ば、上よりはじめ、ありつる人々をかしがらせたまふに、宮の御
 けしきもよくならせたまひて、げに、さもあらん。その山伏を
 召しかへせかし。」とのたまふに、「はや、遙かに行き過ぎて、いづ
 こへゆきけんも知られず。」と啓したまへば、「本意なきことに
 こそあれ。」とせめて、民部大輔が大きなるそら言を、小きやう
 に祈らせんものを。」と笑はせたまふにこそ、御ゆくするたの
 もしく、いとせめて覺えたりしか。

(吉野拾遺)

二〇 早春

貝原益軒



貝原益軒

貝原益軒
 徳川時代の儒
 者、教育家、
 正徳四年歿、
 年八十五。
 あらたまの
 心づから
 ことだつ
 春盤
 げざやかに
 あらは

春は、まづ、一夜のほどにあら
 たまの年たちかへる朝の空
 の光、心づからにや、ふる年
 かはりてのどけし。陸月は
 ことだつとて、貧しき家にも
 春盤などいふものを設く。
 空のけしきやうやうひきか
 へ、東風ゆるく吹きて氷とけ、遠き山邊に霞のうすくたなびけ
 るさま、げに物げざやかに見えて、冬のそらにたちかはれるよ
 そほひ、まづ春の來れるしるしあらはなり。かきねがくれに、

はだれ

遷喬

今ひとしほの色
ときはなる松のみどりも、春くれば、今ひとしほの色まさりけり。
（古今集、源宗）
なづさふけしきだつ

冬より残れる雪のところどころはだれに見ゆるも、ごぞの名残をしむべし。待ちわびし梅のほひ、百花にさきだち、春の消息を得てよろこぶべし。谷を出で、たかきに遷る鶯の、春を迎へても、若き聲、耳とまりてうれしく、花ならで身にしむものなるべし。花鳥をめぐると、これ、まづ春のたまものなり。これをはじめとして、なほ、ゆく先遙かに、さかゆく春のゆたかなる恵、たのもし。千年を経べき緑の松も、今ひとしほの色をまして、つねに見馴れしも、いやめづらしくなづさはれぬ。きさらぎの程より、よろづ皆冬のころ、盡きて、空の色うらゝかにけしきだちて、四方の山々霞みこめたるよそほひ、殊に曙の景色、たとふべきものなくあはれむべし。いにしへの人の、春は曙。」といひけんも宜なるかな。日の光、ところわかねば、數

なごやか
けはひ



春 早

ならぬ垣根の内も、冬にかはりてかゞやき出で、草木生ひて、皆顔色を生じ、花待ち顔になごやかなるけはひうれし。日影も、やうやく長閑になりもてゆけば、人のわざも、ふる年よりいとまありて、いそがはしからず。日ながくして、少年の如く、心しづかにゆたけし。

(樂訓)

參議
文章博士

文章生
得業生

二一 菅 公 その一

菅原道眞は、參議是善の子にして、文章博士清公の孫なり。世世儒家の名門にして、その先は遠く野見宿禰より出でたり。



菅 公

清和天皇の貞觀年中、文章生に擧げられ、得業生となる。道眞、年若き頃、一日、都良香とて當時第一流の文人をおとづれけるに、折節、人々集りて弓を射たりけるが、良香思ふやう、道眞儒家に生れ、日夜學問の外他事なければ、弓の本末だに得知らじ、的矢射させて笑はばやと、自ら弓に矢を持添へ

道眞の好めたるは

遊ばす

矢つぼ

對策

藏人頭

補す

て、春の始なれば、一矢遊ばし候へ。」とぞ勧めける。道眞、さのみ辭退する風もなく、肌おし脱ぎて矢を番へ、うち上げてひきおろし、暫し固めてひようと放つに、矢つぼ違はず命中しけるは、いつの程にか習ひけん。良香感に堪へず、これより大いに道眞の器量に推服せり。

道眞、對策及第し、諸官を歴進して、陽成天皇の御代に、文章博士となり、宇多天皇の御代、寛平三年には、藏人頭となりぬ。近代、皇胤或は大臣家の人のみ、この職に補せらるゝ例なるを以て、道眞、辭すれども許されず。



菅原道眞筆

寛平九年六月、故太政大臣藤原基經の子時平、大納言兼左近衛大將に任ぜら

大納言、權大
近衛大將
任す

儒林

れ、道眞は、權大納言兼右近衛大將に任ぜられぬ。この年七月、宇多天皇位を譲らせ給ひ、皇太子立ち給ふ、これを醍醐天皇と申す。先帝の叡慮により、時平、道眞、相並びて政事を奏決す。道眞は、學徳一世に高く、政治に練達し、時平は、材能ありと雖も、年なほ若く、品行修らず、且、笑癖などありて、人望遠く道眞に及ばざりき。昌泰二年、時平、左大臣に任ぜられ、道眞、右大臣に任ぜらる。共に大將



菅原道眞左遷の圖

朝覲

賦す

機微

を兼ねること故の如し。道眞、上表して曰く、臣は貴種に非ず、家はこれ儒林なり。今日の昇進、人心已に容さず。鬼神必ず瞰まん」と、三たび辭すれども聽されざりき。三年、天皇、朱雀院に朝覲行幸あり。法皇と密議したまひ、左右の大臣、與に天下の政を執るは、統一を缺きて宜しからず」とて、道眞を召し、今より、天下の政、一人にて奏決すべし」と仰せ下されけれど、固く辭して受けざりけり。されど、召ありて、何事もなく退出せば、人の怪しむべければとて、題を賜はりて詩を賦し、天皇法皇より各、御衣を下したまはりて退出せり。このこと、如何にしてか、時平の耳に洩れ聞えければ、その憤、大方ならず。是等の機微をや察しけん、文章博士三善清行、この年、書を道眞に寄せて、退隱を勧めけれども、道眞、従はざりき。

外舅
春宮侍讀

褫ふ
大宰權帥

菅公

二二 菅公 その二

この時に當りて、源光大納言たり、仁明天皇の御子なり。また、藤原定國、中納言たり、こは、高藤の子にて、當代の御外舅なれば、俱に、道眞の下に在るを快しとせず。藏人頭藤原菅根は、當代春宮にいましし時、道眞の推舉によりて、侍讀となりしより、累進榮達するに至りしかど、曾て、事ありて、深く道眞を恨めり。時平、是等の人々と相結びて、道眞が政務に私あるよしをより、
〜 讒奏し、なほ、謀を構へて、陥れしかば、延喜元年正月二十五日、道眞は、つひに、大臣大將を褫はれて、太宰權帥に左遷せられぬ。
道眞、自ら明かにするに途なく、法皇に一首の歌を奉る。

しがらみ

清涼殿

な……そ

流れゆくわれは水屑となりぬとも
君しがらみとなりてとゞめよ

法皇驚きて御涙に咽びたまひ、御自ら申し給はんとて、御乗物にも召さず清涼殿に急がせ給ひて、参内の由仰せ入れられけれども、藏人頭菅根、これを抑へて奏聞せず、衛士、厳しく守りて透間もなかりければ、忝くも、寒空の中を、日暮るゝまで大庭に立ちつくさせ給ひ、恨を飲みて還御せさせ給ひぬ。かくて、道眞、今はとて、住みなれし紅梅殿を出づる時、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花
あるじなしとて春なわすれそ

道眞、太宰府に著きてよりは、謹慎して門を閉ぢ、敢へて外出せず。

二二 菅公 その二

菅公
その二

都府樓
内宴

都府樓纔看瓦色、
觀音寺只聽鐘聲。
と詠ぜり。九月十日の夜に、去年清涼殿の内宴に侍し、君富春
秋臣漸老、恩無涯岸報猶遲、と賦して叡感にあづかり、御衣を賜
はりしことをおもひ出でて、

去年、今夜侍清涼、

秋思詩篇獨斷腸、

恩賜御衣今在此、

捧持毎日拜餘香、

流離

道眞は、かゝる流離の中に在りても、唯、恩を感じ昔を偲びし
のみ、曾て、一語も怨言を吐きしことなかりき。さはあれ、無實
の汚名を千歳に遺さんことは、その堪ふる所にあらず。仰い
で天の照覽を冀ひ、再び、恩免の日あらんことを期して、以て自
ら慰めたり。

然るに、そのかひもなくて、延喜三年二月二十五日、道眞、配所

轉た
奉幣
扶植

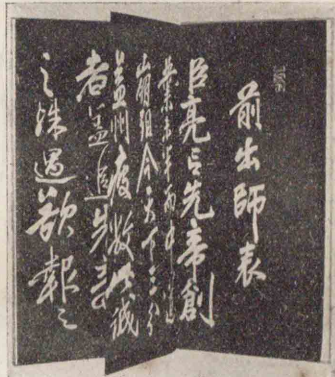


菅原道眞御衣捧持する圖

に薨じぬ。年、五十九。筑前の安
樂寺に葬る。今の太宰府神社の
處なり。後、一條天皇の御代に、左
大臣正一位を贈られ、尋いで太政
大臣を贈らる。これより先、朱雀
天皇の天慶年中、京都の北野に道
眞の祠を建つるものあり。神號
を天滿大自在威徳天神と稱し、貴
賤の崇敬、轉た盛なり。朝廷、また、
歳時の奉幣、絶ゆることなし。
おもふに、藤原鎌足、大功を立てしより、二百五十年、一門、勢力
を扶植して怠らず、その根柢、牢乎として、已に抜くべからず。

挺す

鞠躬



表ノ師出

しなり。道眞の意洵に悲しむべし。昔者、諸葛孔明、幼主を輔けて強敵に當り、大勢已に不可なるを知ると雖も、奮闘遂に止むべからず。乃ち出師表を上りて曰く、臣、鞠躬盡瘁、死して而して後に已まん。成敗利鈍に至りては、臣があらかじめ観る所に非ず」と。道眞の志、またここに在りしなり。

(趣味の日本史に據る)

芭蕉 松尾氏、俳聖と稱せらるる元禄七年大坂に歿す。

其角 親本氏、江戸の門人、寶永四年歿。

燕村 攝津の人、天明三年歿。

太祇 炭氏、江戸の人、明和八年歿。

二三月と梅



梅と月

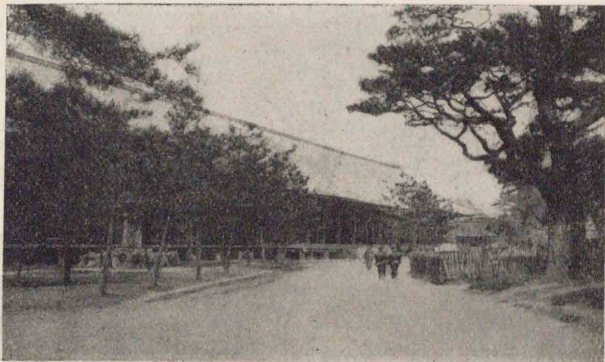
春もや、けしきと、のふ月と梅
芭蕉

白魚をふるひよせたる四手かな
其角

白梅や墨芳ばしき鴻臚館
燕村

山路きて向ふ城下や風のかず
太祇

一茶 小林氏、俳諧
 寺、蘇生坊の
 號あり、信州
 柏原の人、文
 政十年歿、年
 六十五。
 鳴雪 俳人、本名内
 藤素行。
 虚子 俳人、本名高
 濱清。
 洒竹 本名大野豊太、
 大正二年歿、
 年四十二。



三十三間堂

陽炎や手に下駄はいて善光寺
 一茶
 鳴雪
 流れ木やだぶりくくと春の川
 虚子
 山吹や人におぢざる溪の魚
 洒竹
 燕や三十三間堂のあめ

二四 文藝と人生

武者小路實篤

武者小路實篤
 小説家、明治
 十八年東京麹
 町に生る、白
 樺派の領袖。

本音

内面生活

文藝を味はふことで人は先づ人間と云ふものを知ることが出来る。自分以外の他人と云ふものを知る。人間の心を知る。人間の本音を知る。人間社會の出來事を知るものは、歴史があり、新聞記事があり、記録がある。しかし、それ等は、人間の内面生活をさながらに書いたものではない。事件を起す動機や人物は書いてゐても、その人間の本音は書いてない。一々出てくる人間の本音を書いてゐたら、歴史は書けない。ともかく歴史にも文學風のものもあり得るが、純粹の歴史には個人の生活、心理、本音は書くものでない。他人の心はわからないからである。嘘やまちがつたことを書くのを恐れる

ものは、歴史に出て来る人の心の状態を書くことは出来ない。新聞記事でもさうだ、いろ／＼心理的な處まで入つて書いてあれば、十が十迄まちがつてゐる。他人のことはわからないからである。

人間がどんなものであるか、根本的に知るのには文學より他にないのである。文學でもいろ／＼の人の心をまちがひなく書くことは出来ないが、一人の人のことは書くことが出来る。つまり作者の心が、その作品にあらはれる。作者が人間に對し、人生に對し、又自然に對し、又いろ／＼の事件に對してどう云ふ態度をとつてゐるか、又何處まで理解してゐるか、何處まで眞を見てゐるか、又作者の心の動きはどう動いてゐるかわかる。

人生觀

一人の作者がいろ／＼の人物を書きわけたとしても、それは、その作者の内にあるものが同感し得る以外には出られない。そのかはり、作者の心の眞相は露骨にあらはれる。だからいろ／＼の人の作を見ると、いろ／＼の人を知ることが出来る。そして人間と云ふものはどんなものであるか、そして自分の見てゐる世界と人々の見てゐる世界とを比較して、自分の考への正しきか、又不足してゐるかを知ることが出来る。そしてそのことによつて自己を生成させることが出来る。

自分の人生觀、社會觀を廣くし、大きくし、正確にすると云ふことは、自分の世界を廣くし、大きくし、明らかにすること、人間にとつて大事なことである。

ゲーテ
(Goethe)
獨逸の大家
哲學家、科
造諸が深
つた。學に
深かに

自分はゲーテの言葉として「外國の言葉を覺えるのは、その國の文明を占領することだ」と云ふ意味を學生時代にドイツ語の先生に教はつたことがある。自分の記憶ちがひかも知れないが、このことは本當のことと思ふ。誰が云つたにしても、ゲーテの言葉は、

それと同じ意味で、他人の作品を理解すると云ふことは、その人の内面生活を自分のものにするにすぎない。又多くの人とつきあつても本音をはく人は少ない。他人の心の内にはどんなものが藏されてゐるか、知ることには出来ない。しかしその人の作品をよめばすぐわかる。その人の苦しみ、その人の喜び、その人の經驗、その人の見てゐる世界が皆わかる。



武者小路實篤

外國の人間のことを知るのでも、その國の文藝を外にしては、本當に知ることには出来ない。文明は知ることが出来ても、外國人の人情や出來事を知ることが出来ない。處が文學を見ると、矢張同じく人間であること云ふことがわかる。決して人間以外のものではないことがわかる。それと同時に、外國の人がどんな生活をしてゐるか、根本的にわかる。この世にはどんな人間があるか、どんなことを考へ、又感じ、

私にたまに何かしたい。
 内の生命を外に出したい。
 出さねばならぬ。エサも空に
 はき出すのでなく大地の
 上に喰ひこむやうにはき
 出した。人の心は喰ひこ
 むと云つてもいい。

実篤

武者小路實篤筆蹟

又よろこび、かなしむ
 かと云ふことを知る
 ことは無意味ではな
 い。自分の人生を豊
 富にし、立派にする材
 料を得ることは、無意
 味な事ではない。又
 人間のかくされた方
 面のことや、人間の生
 きるために苦闘してゐる有様を知るのには、無意味ではない。
 人間、殊に人情、人心を知ることには、人生にとつて大事なこと
 である。

(生命に役立つ爲に)

佐藤惣之助
 詩人、俳人。
 明治二十三年
 神奈川県に生
 る。

情緒

二五 瓜の天地

佐藤惣之助

おもしろいお伽噺や傳説をよむとき、きつといい王様がで
 てくる。幼い空想をすると、そんな王様になつて見たくなる。
 併し王様はなか／＼氣高くつて正しいので、少し窮屈ではな
 いかしらと考へる。どう、そこでだいたい王様の人世観はわ
 かるが、その自然の見方——といったやうな詩的な感情はわ
 からない。子供には必要はないかも知れないが、作者として
 はそれがききたい。が、どうもはつきりしないので、理はわか
 り心はわかつても、情緒、感覺といふやうな近代的で繊細な氣
 分が感じられぬ。
 ところが近ごろ、布哇の傳説のある頁をよんでみると、すつ

かり感覺的とも云へさうな嘶にぶつかつた。それはどこにもある人間創造の一節であるが、海上をあちこちと旅をしてゐた神が、どこから來てどこへ行くのだから、又どんな風をしてゐたか解らないが、何しろ遠い所から眼にも見えない澤山の空氣とも精神ともつかぬものを携へて來て、火山の火と塵埃でつくりあげ、生命の呼吸を吹きこんだといふのである。

それと同時に、大地といふものは、大きい眞桑瓜のやうなもので、四柱の神が、それをすかりと裁つて天地を分けた。天はその片方の瓜のお椀、地は片方の瓜のお椀のやうなもの、少し横に長い。その天の瓜の缺片が、一つは太陽になり、一つは月になつて、中にいつはいはひつてゐた種子は、一面にはつと飛びちつて星になつたといふのである。夏になると、そんな感

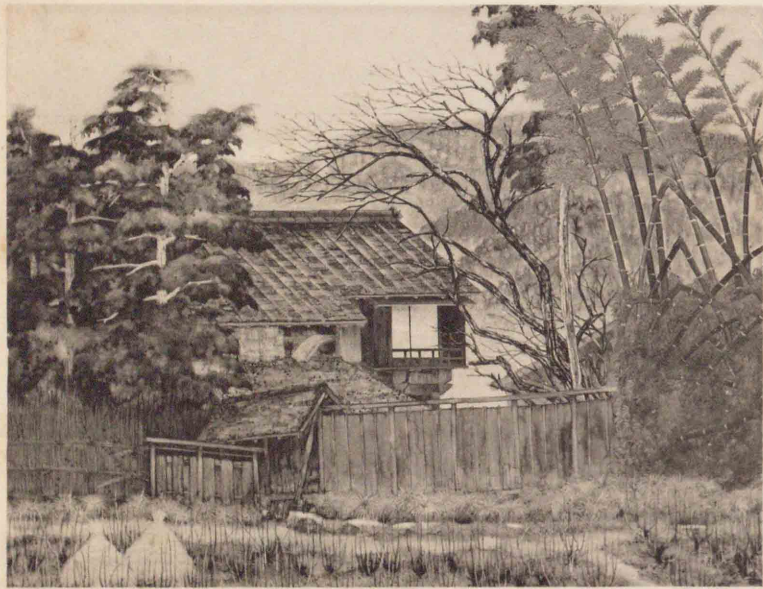
幻影

じがする。殊に太洋の中の島にゐたら、一寸そんな感覺的の幻影を感じよう。それから、下の方の瓜の中から、肉やら花やら匂ひといふやうなものがでる。上から光や雨や風がでる。その中に、火山の火と塵埃で出來た人間があらはれて、自由なものを食べる。たのしい遊びの生活をする。水を飲み空氣を吸ふといふ。その上にうつかり寝てゐたら、又神がその男の肉を割いて女をつくり、その裂目を縫ひあはして置くと、男が眼ざめて見ると、傍に美しい女が眠つてゐたといふので、これは自分の影だらうと思つて、女の事を「影の人」と呼んで仲よく暮らしたといふのである。それと同時に、今迄自分のうしろに黒いものがついてゐたのが、妙に氣味悪かつたが、女が生れてから影といふものが怖くなくなつた。と云ふので、

口碑

妙に感覺的でありすぎる。その土人の口碑はおもしろい。あたらしい夏の詩のやうな感じがする。その點が、未開な世界ほど人間も感覺的で、新鮮な感情があるやうに思へる。

僕はその話が好きだ。お伽噺も傳説も、その匂ひやら色あひやらを見ると、いつの世界にもわれ／＼の持つてゐるものが、より奇抜にあらはれてゐる。立派な宴會のご馳走などを、王様のやうなのんきな氣で眺めてゐると、この世界は、初め瓜であつたよ——と感ずても面白いではないか。その瓜を二つに切つて、地から花ができる、水がでる、匂ひがでる。上から光がくる、風がくる。そして娘は影、かろい初夏の露臺でもあると、全く天地は食べられさうにつやつやとして、青空でも、若い花や葉でも、小鳥でも、みんなあかるい瓜の上にある——と



早春

(石本光太郎筆)

瓜の天地

瓜の天地

瓜の天地

瓜の天地

思つてもよいではないか。そんなのんきな、うまさうな、水々しい幼い心といふものを、僕は詩に得たいと思ふ。

夏になると、その野蠻な、しかし新らしい、感覺的なもの見方がかへつてくる。さうなると、お伽噺の王様や人形ででもあつてもよいから、そんなのんきな、おいしいものの喰べられる島に坐つて、三時間ぐらゐは、ぶか／＼と煙草をのんで、人間の裁判と人生觀のくらい運命の傘からのがれて、瓜の太陽、瓜の月を眺め、ごろりと轉がつてゐられたら面白い。どう、人はそんな馬鹿々々しい野蠻な感覺は持ちあはさないかしら……は、は、は。

龕中の幽光

「時」の流

テームス河
(The Thames)

二六 ロンドン塔

夏目漱石

ロンドン塔の歴史は英國の歴史を煎じつめたものである。過去といふ怪しい物を蔽うた帳が自づと裂けて、龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものはロンドン塔である。すべてを葬る「時」の流が逆しまに戻つて、古代の一片が現代に漂ひ來つたとも見るべきは、ロンドン塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して、馬車、汽車の中に取残されたのはロンドン塔である。

このロンドン塔を、塔橋の上から、テームス河を隔てて眼の前に望んだ時、余は今の人が、はた古の人かと思ふまで、我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初とはいひながら、物靜か

傳馬

な日である。空は灰汁桶を搔交ぜたやうな色をして、低く塔の上に垂懸つてゐる。壁土を溶かしこんだやうに見えるテームスの流は、波も立てず音もせず、無理やりに動いてゐるかと思はれる。帆掛舟が一隻、塔の下を行く。風のない河をあやつるのだから、不規則な三角形の白い翼が、いつまでも同じ所に停つてゐるやうである。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。たゞ一人の船頭が艫に立つて、櫓を漕ぐ。これも殆ど動かない。塔橋の欄干の邊には、白い影がちら／＼する。大方鷗であらう。見渡した所、すべての物が靜かである。もの憂げに見える。眠つてゐる。皆過去の感じである。さうしてその中に、冷然と、二十世紀を輕蔑するやうに立つてゐるのが、ロンドン塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史のあ

九段遊就館

九段遊就館



橋 塔

る限りは、我のみはかくてあるべしと言はぬばかりに立つてゐる。その偉大なのは、今更のやうに驚かれた。この建築を俗に「塔」と稱へてゐるが、塔といふのは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成立つた大きな地域である。並び聳えてゐる櫓には、圓いもの、角張つたもの、色々な形状はあるが、いづれも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を

九段の遊就館
東京市麴町

セピア
(Sepia)

永劫に傳へようと誓つてゐる如く見える。九段の遊就館を石で造つて、二三十並べて、さうしてそれを蟲眼鏡でのぞいたら、或はこの「塔」に似たものが出來上りはすまいかと考へた。余はまだ眺めてゐる。セピア色の水分を以て飽和した空氣の中に、ぼんやり立つて眺めてゐる。二十世紀のロンドンが、我が心の裏から次第に消去ると同時に、眼前の塔影が、幻の如き過去の歴史を、我が腦裏にゑがき出して來る。朝起きて啜る澁茶に立つ煙の、寢足らぬ夢の尾を曳くやうに感ぜられる。暫くすると、向岸から長い手を出して余を引張るか、怪しまれて來た。今まで佇立して身動もしなかつた余は、急に川を渡つて、塔に行きたくなつた。長い手はなほなほ強く余を引く。余は忽ち歩を移して、塔橋を渡りかけた。長い手は

一目散

一月

イタリーの詩人ダンテ作「神曲」地獄篇中の句。呵責

常態を失ふ

ぐい／＼牽く。塔橋を渡つてからは、一目散に塔門まで馳着けた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は現世に浮游するこの小鐵屑を吸収してしまつた。門を入つて振返つた時、

憂の國に行かんとする者はこの門を潜れ。

永劫の呵責に遭はんとする者はこの門を潜れ。

迷惑の人と伍せんとする者はこの門を潜れ。

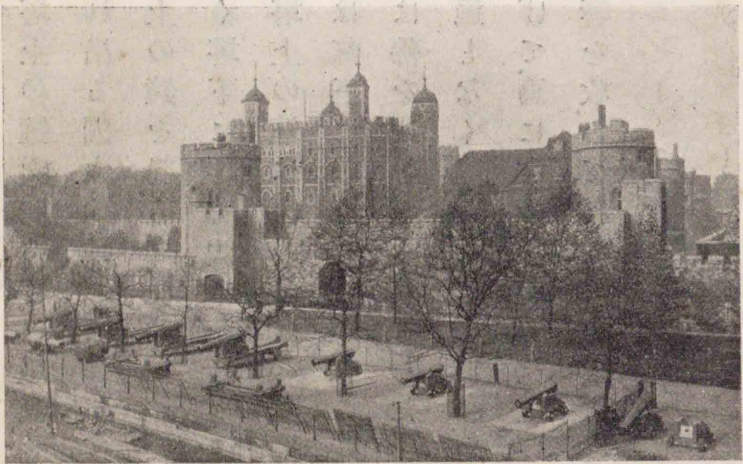
正義は高き主を動かさず、神威は、最上智は、最初愛は吾を作る。

我が前に物なし、たゞ無窮あり。我は無窮に忍ぶものなり。

この門を過ぎんとする者は一切の望を捨てよ。

といふ句がどこぞに刻んではなにかと思つた。余はこの時

すでに常態を失つてゐる。



二六 ロンドン塔

空壕にかけてある石橋を渡つて行くと、向うに一つの塔がある。これは圓形の石造で、石油タンク状をなして、恰も巨人の門柱の如く、左右に屹立してゐる。その中間を連ねてゐる建物の下を潜つて、向うへ抜け出る。中塔とはこの事である。少し行くと、左手に鐘塔が峙つてゐる。眞鐵の楯、黒鐵の甲が、野を蔽ふ秋の陽炎の如く見え、敵遠くより寄すると知れば、

塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て逃れ出る囚人の、逆しまに落す松明の影から闇に消える時も、塔上の鐘を鳴らす。心傲つた市民が、君の政非なりとて、蟻の如く塔下に押寄せてひしめき騒ぐ時も、亦塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。或時は無二に鳴らし、或時は無三に鳴らす。祖來る時は祖を殺しても鳴らし、佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は、今いづこへ行つたやら。余が頭をあげて、鳶に古りた櫓を見上げた時は、寂然としてすでに百年の響を収めてゐる。

遠く虚佳木
遠く虚佳木

(濠虚集)

二七 故郷の花

薩摩守忠度と申すは入道の舍弟なり。淀の河尻まで下りたりけるが、郎黨六騎相具して、忍びて都へ歸り上る。如法夜半の事なるに、五條三位俊成卿の宿所に行きて門を敲く。内には之を聞きけれども、かゝる亂の世なる上、いぶせき夜半の事なれば、敲けども敲けども開かざりけり。あまりに強く敲きければ、やゝ久しくありて、青侍を出し、戸を開かで之を問ふ。「忠度と申す者、見參に申し入れたき事ありて参りたり。」と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細目に開きて對面あり。忠度、宣ひけるは、かかる身として、御爲憚りあれども、所詮一門榮華盡きて、都に安堵せず、西海

入道
清盛。

五條三位
藤原俊成、元
久元年(二六四)
九十一歳にし
て薨す。
いぶせし

青侍

砌下 引合 忽劇

へ落下り侍り。亡びんこと疑なし。世靜まりて後、定めて敕撰の沙汰候はんか。縦令、身は八重の潮路の底に沈むとも、藻鹽草かきおく末の言葉後の世までも朽ちぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ出で、河尻より忍び上りて侍り。是ぞ、年頃詠み集めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に、波の下に水屑となさん事、遺恨に侍り。之を砌下に進らせ置き候。敕撰の時は、必ずおぼしめし出せよ。とて、卷物一卷泣く泣く鎧の引合より取出でたり。三位感涙を流し、之を受取り、御詠一卷預り置き候ひ畢んぬ。これは、永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南の爲か。この忽劇の中に御音信に預る事、恐悦少なからず候ふ。たとひ、うき世を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、敕撰の時はおもひ出で侍るべし。とのたまへば、忠度、今

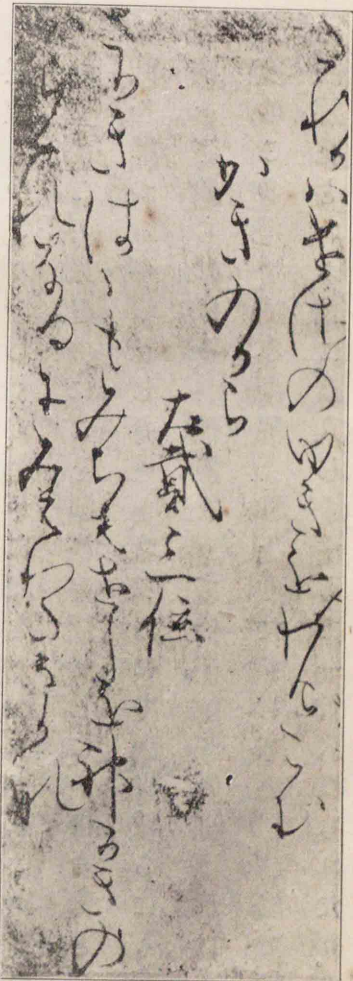
古詩 大江朝綱の
於鴻臚館
餞北客詩
序中の句なり

は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも、思ふことなしとて、馬に乗り、古詩を、前途程遠、馳思雁山之暮雲、後會期無、露縷於鴻臚之曉、涙と、うち上げうち上げ詠じつ、南を指してぞ落ち行きける。本文には、後會期遙カナリと書きたるを、忠度、還り見るべき旅ならず、今を限りの別なりと思ひければ、後會期無と詠じけるこそあはれなれ。

三位ものこり惜しくて、遙かに之を見送りて、あはれ、世に在りしには、この人どもにこそ詔ひ追從せしに、かはる習とて、今は門を隔つる事の悲しさよと、哀なるにも涙、優なるにも涙、忍の袂をぞ絞られける。代靜まりて後、千載集を撰ばれけるに、忠度のこの道を嗜み、河尻より上りたりし志を思ひ出で給ひて、故郷花といふ題に、讀人しらずとて一首入れられたり。

千載集
文治三年(八四七)成る。

さ、なみ



集載千

さ、なみや滋賀の都は荒れにしを

むかしながらの山ざくらかな

とよめる歌なり。名字をも題し、數多も入れまほしかりけれども、朝敵となれる人の態なれば、憚り給ひて、唯一首ぞ入れられる。亡魂如何に嬉しく思ひけん、あはれにやさしくぞ聞えし。

(源平盛衰記)

二八 扇の的

さる程に、阿波・讃岐に、平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの峯、この洞より十四五騎、二十騎打連れ打連れ馳せ來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。

「今日は日暮れぬ、勝負を決すべからず」とて、源平互に引退く所に、沖より尋常に飾つたる小船一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。あれは如何にと見る所に、船の中より、年の齡十八九許なる女房の、柳の五衣に紅の袴きたるが、皆紅の扇の日出したるを、船の柩に挟み立て、陸へ向ひてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、あれは如何に。」と宣へば、射よと

尋常

段

柳の五衣
柳の裏青、
裏青、表白、

柩

手垂

小兵

さん候

褐

衾あいろふあしじろの太刀

切斑ぬための鏑
滋籐

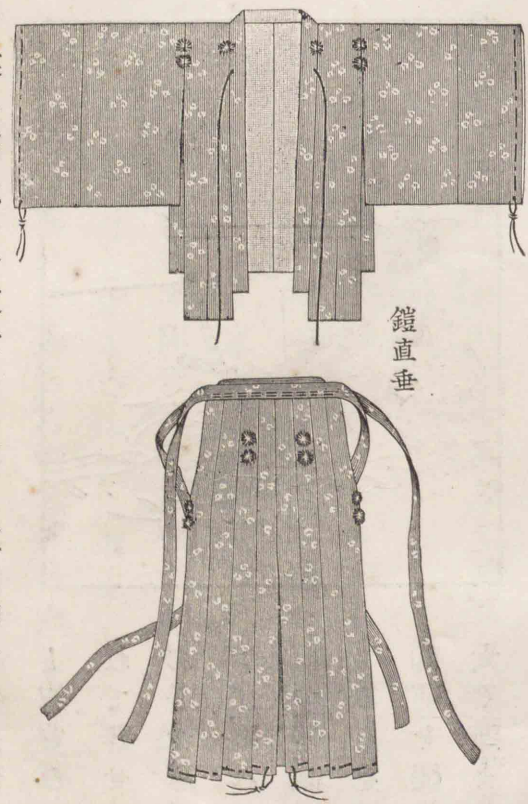
にこそ候らめ。但し、大將軍の矢面に進んで御覽ぜられん所を、手垂に狙うて射おとせとの謀とこそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや候らん。と申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かある。と問ひ給へば、手垂ども多う候中に、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ、小兵では候へども、手は利いて候。と申す。判官、證據があるか。さん候かけ鳥などを争うて、三つに二つは必ず射落し候。と申しければ、判官、さらば與一呼べ。とて召されけり。

與一、その頃は、いまだ二十ばかりの男なり。褐に、赤地の錦を以て、衾端袖いろへたる直垂に、萌黄緘の鎧著て、あしじろの太刀を佩き、二十四さいたる切斑の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽割り合せて、矧いだりけるぬための鏑をぞさし添へたる。滋籐

高紐

一定

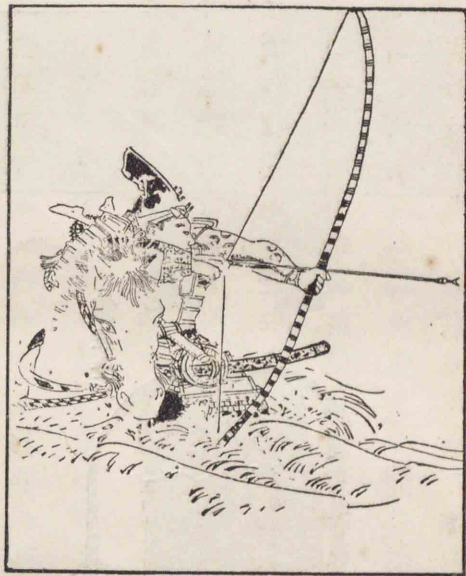
の弓脇に挟み、冑をば脱いで高紐にかけ、判官の御前に畏る。判官、いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし。



て候ふべし。一定仕らんずる仁に仰せつけらるべうもや候らん。と申しければ、判官大きに怒つて、今度鎌倉を立つて西國

と宣へば、與一、仕るべしとも存じ候はず。之を射損ずるものならば、永き身方の御弓矢の疵に

へ向はんずる者共は、皆義經が下知を背くべからず、それに少しも子細を存ぜん人人は、是より疾うく鎌倉へ歸らるべし。」



金覆輪

とぞ宣ひける。與一、重ねて辭せば悪しかりな
那んとや思ひけん。「さ候
須はば、逸れんをば存じ候
與はず、御説で候へば、仕つ
一てこそ見候はめ。」とて、
御前を罷立ち、黒き馬の
太く逞ましきに、金覆輪
の鞍置いて乗つたりけるが、弓取り直し、手綱搔い繰つて、汀へ
向ひてぞ歩ませける。身方の兵ども、與一が後を遙かに見送つ

仕らうずる

三月十八日
文治元年。

鏑矢



て、「この若者、一定仕らうずると覺え候。」と申しければ、判官も
頼もしげにぞ見給ひける。矢頃少し遠かりければ、海の中一
段許打入つたりけれども、猶、扇のあはひは、七段許もあるら
んとこそ見えたりけれ。

此は三月十八日、酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈し
う吹きければ、磯打つ浪も高かりけり。船は揺り上げ揺りす
る漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。沖には、平家船を一
面に並べて見物す。陸には、源氏轡を並べて之を見る。何れも
何れも、はれならずといふことなし。

與一、目を塞いで、南無八幡大菩薩、別しては、我が國の神明、日
光の權現、宇都の宮、那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の眞中
射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切り折

伏束

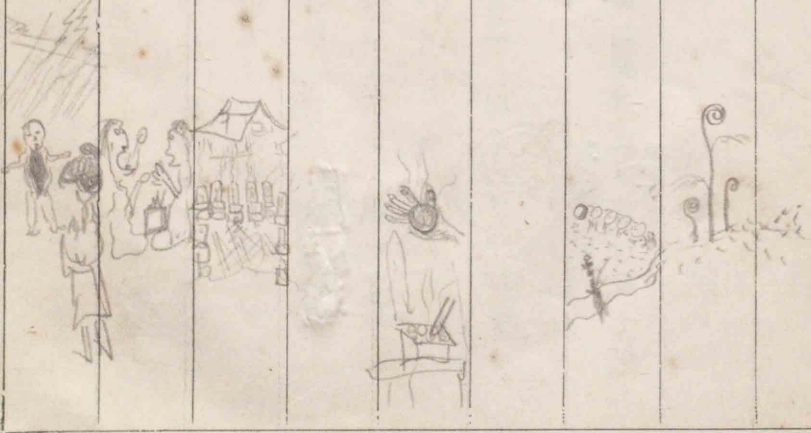
り自害して、人に復び面を向くべからず。今一度、本國へ歸さんとおぼしめさば、この矢はづさせ給ふな。」と心の中に祈念して、目を開きたれば、風も少し吹弱つて、扇も射よげにこそなりたりけれ。

與一、鏑を取つて番ひ、能引いてひようと放つ。小兵といふ條十二束三伏、弓は強し、鏑は浦響く程に長鳴して、過たず扇の要際二寸ばかり置いて、ひいふつとぞ射切りたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ揉まれて海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、沖には、平家艇を敲いて感じたり、陸には、源氏簾を叩いてとよめきけり。

(平家物語)

二九 早蕨(川柳)

早蕨もまだ光陰をにぎりつめ
道とへば一度に動く田植笠
おさへれば薄はなせば蚕
手の甲へ餅を受取る煤はらひ
夜が明けて狩場狩場へ外科を呼び
知れてゐるものを數へる泉岳寺
歌一首あつて話がけつまづき
雷をまねて腹掛やつとさせ



昆沙門
を
外

投入のひからびてゐる間の宿

うたゝねの顔へ一冊家根にふき

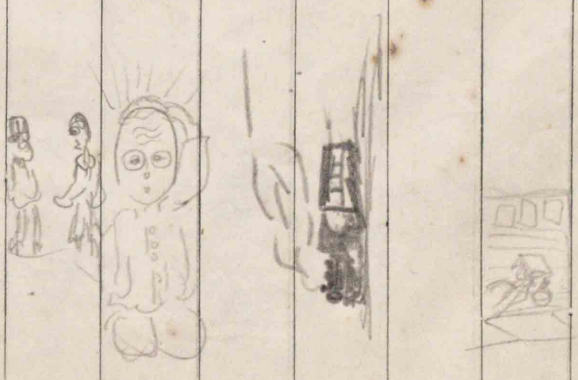
額文字の筆法臆ではねてほめ

昆沙門の外は足弱ばかりなり

物まうにどうれくと二目うち

禿頭よい分別をさすり出し

逃げしなに覚えてゐるは負けた奴



吉江喬松

孤雁と號す、
早稲田大學教
授、長野縣大
人、早稲田大
學、英文科出
身、後、巴里
大學に学ぶ。

三〇 印度洋 (自習文)

吉江喬松

コロンボから十二晝夜、三千七百海里の間は、波の烈しい日とては一日か二日であつた。

併しそれとても、私一人にとつては、全く食卓へ出られないほどではなかつた。

コロンボを出帆した十月七日の午後一時から二晝夜餘を經過しないうちに、我々の船は赤道を通過して南半球へはひつた。

印度洋のただ中を、この季節に航行する船としては當然のことで、はあらうけれど、我々は豫期しないほどの涼しい氣候の中で、熱帶を、太陽の直射の下を通過するのであつた。

風は或時は南から船の煙を後方へ、斜めに靡かせて吹いた。或時

モンスウン
(Monsoon)
赤道の南北三
十度以内の海
上に起る恒
風。

トワイライト
(Twilight)
日出前、日没
後の薄あか
り。

は北から、同じ角度に左舷の波の上へ、黒い煙を這ひ廻らせた。
貿易風モンスウンの季節は既に過ぎたので、たゞそのなごりの微風のなかを、
爽涼な感じを味ひながら、南西へ、南西へと、我々の船はアフリカの大
陸を目掛けて下つて行くのであつた。

晴渡つた日には、早朝から、日光は燃えるやうな、併し我々の温帯地
に見る如き曇つた赤さではなく、黄金色に澄んだ光を、上下二重の虚
空一面に溢らした。實際、熱帯には殆ど薄明トワイライトがない。殊に大洋の上
に於ては、暗が直ちに光に接した。日が直ちに夜の歩みの後を追う
た。まだ闇が水の曠野の上に立ち籠つてゐると思つてゐると、何の
豫表もなく、何の警告もなく、全く不意撃に、水平線へ日の一角が浮び
出る。

初は光を發しない。たゞ朱玉の一片である。闇もまだ氣がつか

ない。波もまだ騒がない。見る／＼その朱玉は、水際を抜け出でて、
忽ちに金光をばつと四散せしめる。第一に目醒めて騒ぎたつものは
波である。きらつとその光波が、空際から傳播すると、もうそれが
八方へ散つて、争つてその洗禮を受けようとする。闇はもうこの裏切
りに逢つては全く力をなくしてしまふ。大きな幻のゆらぎ！今
までの自分の領土を、夜の國を、直ちに日の前へ展開して、何處へ逃げ
る力もなく、居ながらにして姿を消してしまふ。

落日の場合でもさうである。一日の間、たゞ大洋の水と、我々の船
とのみを照らしてゐた太陽が、まづ第一に水平線へ休息の席を求め
得た時、次には最後の力を、一時に集め出して、全體の光を宇宙に發散
せしめた後で、吸込まれるやうに水平線下へ没した時、夜の翼は直ちに
水の上へ、蒼空へ一面に擴げられる。日は惜氣もなく、光の領土を

闇の前へ投出す。闇は急速にその利權を回復する。

大洋の果しない荒漠の上で、晝と夜とはこの烈しい對照を見せて交代する。夜を支配するものは水の世界であり、晝を來らすものは蒼空であるやうに、上下二つの無限の領土は、虚空を兩分して暗明の影を交互に投じ合ふ。

ところが、この急激に落來る印度洋の夜の天空を、月の光が次第に照らすやうになつて來た。最初の雲の間に片月の影を認めたとき、單調を破られる一種の懐しさを感じたが、宵ごとにその感じは次第に強くなつて來た。

實際、この隠かな、人の心を押鎮める清涼な月の光が、果しなき波の頭を照らすのを見るときは、陸上で感ずるよりも一層の懐しさを覺えるものである。日中の餘りに華かな眩惑するやうな魅するやう

な太陽の光と對照して、一層の柔かさ、静けさを味はせるが故であらう。

たゞ熱帯の月には、我々の地帯で大方の場合に見るやうな、銀白の磨き澄ました滴るやうな光ばかりでなく、其に幾分の黄色が加はり、光度も強くなつてゐるのである。

彼南あたりの陸上でも、洋上のこの甲板でも、満月の夜には新聞ぐらゐは讀むことが出来る。

けれど、晝間に見る目を痛くさせ、脳神經までも攪亂するやうな日の光に比べると、何といつても我々温帯人に、最も新しい感じを與へるものは、この洋上の月である。この洋上の月は、異郷の情を起させるといふよりは、直ちに故郷にゐる感じを與へる。

それに、天の高く、水の果しないといふ感じを深く味ははせるもの

彼南
マレー半島の
港。

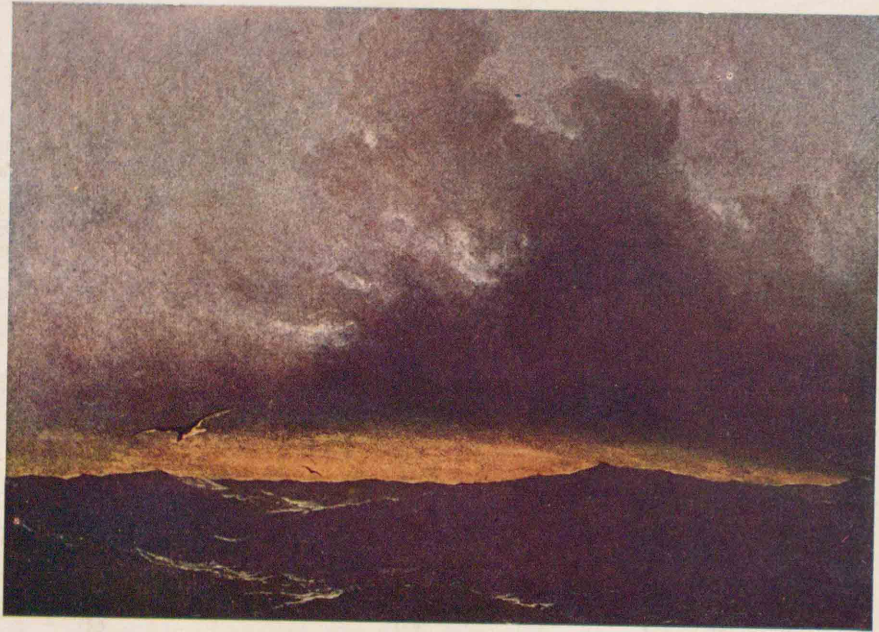
攪亂
かきみだす。

は、大洋上の月夜である。晝間とても、船外に、波浪を除いては、何の響きもないのであるが、夜更けて、紫紺の空に、高くかゝつてゐる月を仰いで立つてゐると、如何にも静寂な感じが身に沁み、悠久の思ひが胸をめぐる。

印度洋特有であるといふ一波長二三海里にも亘る高い波のうねりが、その濃き紺青の兩翼を思ふまゝに擴げて、天際に頭をもたげるのもかゝる時である。

すると月光は、その大鵬の翼の上へ、銀絲の無數の雨をそそぎかける。瞬く間に、その翼の羽叩きは、波長の伸延は、見える限りの表面へ、ゆるやかな動搖と、暗黙の不安とを與へて、その道路に當る何ものもその中に包み、その上へ載せようとする。船も忽ちその上へ乗せられてゆるやかにゆられるけれど、船中の人間には、別にそれが際立つ

大鵬
すばらしく大
きな鳥。



印度洋

スクリウ
(Mar S)

ては感じられない。たい水中で、晝夜を分たず、一分間六七十の回轉數を繰返してやまない船尾の雙暗車スクリウが、その不安を受けて、船の後方へ描き出す波の渦紋に複雑した形を見せるだけである。

併し老練な船乗は、水中の暗車スクリウと同じく、直にこのうねりを身に感じて、甲板を歩きながら、暗車の響に耳を傾けてゐる。そして空を仰いで、満月の光が、檣頭に碎け、四方に散り、いま船を背に乗せたまゝ、なほ先へと身を伸して行く大波の頭が、時に亂れて銀の房となり、白玉の群となるのを照し出すのを、ちつと眺めいつて、黙つて立てゐる。

實際大洋通ひの船に乗つてゐる人々に、眞に船乗の樂しみを味はふのは如何なる時であるか。」と訊ねると、「印度洋あたりで、月の晩、一人きり、夜更けに甲板に立つてゐると、何とも言へない静かな心持がしますな、まあ船乗らしい氣分といつたらそんなものでせうか。」と、私

サザンクロス
(Southerncross)

ウオッチをして
見る
(watch)
見張をして
見る

の訊いた多くの人は答へた。彼等は常に動き揺れ、進行してゐる中に、求め得られる静けさを、その船乗の楽しみを與へてくれるのが月夜であると思つてゐる。またこの頃の夜天を樂ましめるものは、南極星サザンクロスの出現である。赤道を越えて南半球へはひつたばかりの日には、如何に南方の水平線を眺めやつても、我々の目へ、別に異なつた星影は映らなかつた。船橋ブリッジに立つて、終夜ウオッチをしてゐる士官の一人は、早曉よあけの四時頃、南方の天際に見えるから、晴れた日の朝早く、見えたらば直ぐ告げてくれるといふ約束にして置いたが、遂にその運びに行かなかつた。その間に三四日経過した。すると、今度は最早や夕方から、華かな日が静かな夜に直ちに接する天の一方、南の水平線から餘り高くない所に、四つの星が、十字を圍むやうな形に輝いてゐるのを認めた。

濃い紫色の空が、少し下つて色淺く、微明ほのるく、水と接する一線を下に見て、燦爛と閃くこれ等の星の光は、北斗の七星に比べれば稍、強いやうに思はれた。南極を中心として周圍二十度ぐらゐの天上を運行回轉するこれ等の星としては、今我々に最も近く見えるのかも知れない。この十字星の上に、默星ダークスターと呼ばれる三個のやゝ小さな星が輝いてゐる。そして我々が今見る十字星は、クロッスを垂直の姿に立たしめないで、稍、斜めになつて、その尖端が直ちに波を射てゐる。その下には濃い藍青の遠波が、おだやかな胸を開いて、その尖端を抱かうとしてゐる。

若し南半球を故郷としてゐる人が、久しぶりに北方から赤道を越えての歸り路に、遠く洋上に閃くこの星を眺めやつたならば、きつと胸を踊らさずには居られまい。我々が夜毎に仰いだ北斗は、もう波

マダカスカル
(Madagascar)
印度洋にある島。

ナタル港
(Natal)
南南弗利加聯邦にある。

間に影を沈めてしまつた。空の色にも、星の配置にも、異國の感じは漂つてゐる。

マダカスカルの南端の一角が、朝靄の中にぼかし出された。幻のやうな山影、波に消え沈む一帯の陸地、それも一日ならずして、また積水の累層の中に隠れてしまつた。そしてアフリカの大陸が、その凸凹した岩角と、濃緑色の丘陵とを、我々の眼前に連互せしめたのは、更に一日たつてからであつた。

ナタル港(ダアバン)では、溝のやうに狭い岩壁の間をすれ／＼にはひつて、船は、丘陵の下、石炭庫の側へ横づけになつた。いま我々の前に見えるのは、赤い瓦を葺いた、緑葉の中に埋つたダアバン市の人家の連なりである。湖水のやうに穏かで、平かな灣内には、白い淺瀬も所々に見えて、その上に眞白な海鴨が列をなして並んでゐる。市街

は、その淺瀬の手前の波打際から丘陵の上へかけて、下街は商館の並列、丘上は居住街と區別して、その中間に、會堂の尖塔が、其處此處に聳えてゐる。

そして丘陵の背後からは、陸地の奥の山々が、夕方の風を靡かして遠く見え隠れしてゐる。

今夜は、久しぶりで、暗車の響もしない後部甲板から、陸上の市街の灯影に照らされる全景を眺めやつた。

「海上より見たる市街の灯影ほど美しいものはない。」とモーバツサンはいつてゐるが、實際、それは、門司でも、香港でも、シンガポールでも、彼南でもさうであつた。實際この春半ばの南亞の港には、やゝ冷たい夜の空氣にも高い花の香が漂つてゐた。水にも黄色な花粉が渦紋をまいてゐた。そして市街の灯は、華かに明るく、丘上より海岸

モーバツサン
(Mauvassan)
(一八五〇—
一八九三)
フランスの
小説家、
自然派の大
家。

日二月三年四和昭
 濟定檢省部文

刷行 印日 五月十年參和昭
 發行 發日 十月十年參和昭
 刷印版再正訂日 五廿月二年四和昭
 行發版再正訂日 八廿月二年四和昭

文國等中

昭和四年四月定價				全十冊				定價					
卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十	卷一	卷二	卷三	卷四
金七拾壹錢	金八拾壹錢	金七拾八錢	金七拾五錢	金六拾五錢	金六拾參錢	金七拾五錢	金七拾五錢	金七拾五錢	金七拾五錢	金四拾參錢	金四拾九錢	金四拾七錢	金四拾五錢



發賣所

東京市神田區
 今川小路二ノ十一

振替口座
 東京八八一五番

金港堂書籍株式會社

發行所 金港堂書籍株式會社
 代表者 原安三郎
 印刷所 株式會社 秀英舍
 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

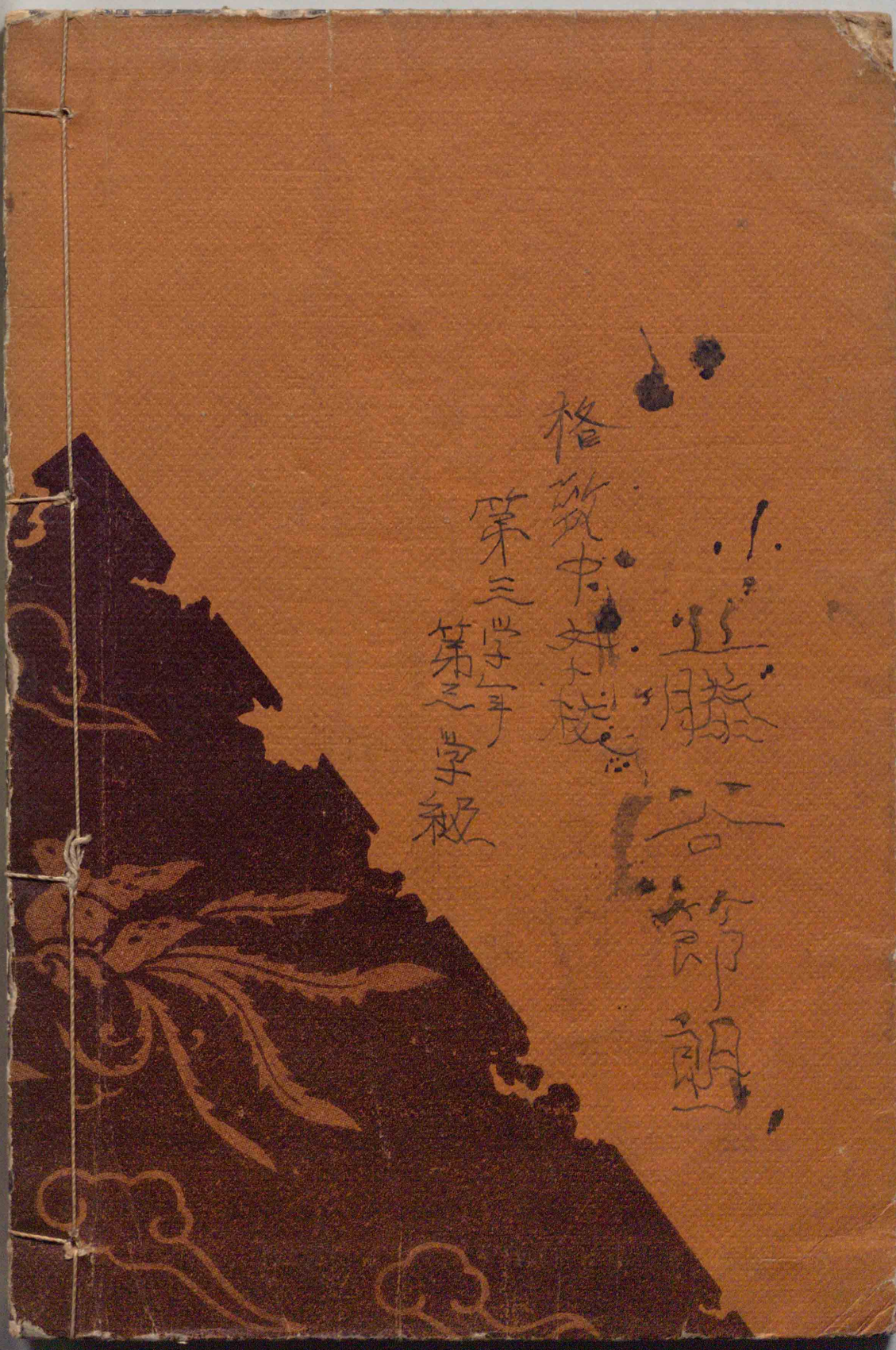
東京市神田區今川小路二丁目十一番地

著作者 藤井乙男

中等國文 卷六 終

君は幾多の星を撒き散したやうに楽しく輝いてゐる。
 (輝く自然)

君は幾多の星を撒き散したやうに楽しく輝いてゐる。
 君は幾多の星を撒き散したやうに楽しく輝いてゐる。
 君は幾多の星を撒き散したやうに楽しく輝いてゐる。



小笠原節朗
 格致中女校
 第三学年
 第三学級